

論 文

『桑華蒙求』概略・出典覚書（下巻）

本 間 洋 一

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
教授The outline and source of *Sokamogyu*

Youichi Honma

Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Professor

【緒言】

本稿はこれ迄の上・中巻（『同志社女子大学学術研究年報』第六三、六四巻、二〇一二年二月、一三年二月）の続稿であり、二〇一一年度個人研究助成（『桑華蒙求の研究』）による成果の一部である（大尾）。

【キーワード】蒙求 人物故事 日中対照 漢学教養書

1 素戔娶女

素戔烏尊すさのおみことが出雲の簸ひの川上の鳥髪やまのあつちの地に到ると、老翁老婆が童女を前にして啼いていた。理由を問うと、これ迄毎年八人の乙女が八岐大蛇やまのあつちに食われ、今年もまたその時となったので哀泣すると答えた。素戔烏はその娘奇稻田姫くしなだを自分に奉らせ、大蛇を殺すべく垣を作り、八門八棚を造って各々に酒槽を置き待ちうける。大蛇がやって来て飲酒酔臥するや彼は十握剣じゅうかつかを手に大蛇をすたすたに斬った。

出典は『日本書紀』（巻一・神代上・第八段）で、「一書曰」の部分も取込んで記述。他に『新日本紀』（巻二三・和歌一・神代上）『日本紀略』（前篇一・神代上）『帝王編年記』（巻一・地神・天照大神）などにも類似の記事が見える。

2 赤帝哭姫

漢高祖劉季は亭長の時、県あがたの命令で人夫を酈山りやまに護送するが逃亡者がでた。彼は豊県あがたの西の沢中で会飲し、人夫を解放して「皆逃げる、俺も逃げる」と言った。彼が壮士十餘人を従え、酒をあおり夜道を行くと大蛇が横たわっていたが、彼は畏れず剣で斬り、その先で酔臥した。後統ごとうの者がやって来たところ、夜に老嫗らうおんが声をあげ泣いているので理由を問うと、自分の子は白帝の子で蛇に化けて道にいたが、赤帝の子に斬られたという。老嫗が嘘をついていると思ひ答打とうとするや嫗の姿は消えた。高祖に事の次第を報告すると、彼は心中喜び自信を持ったのであった。

出典は『史記』（巻八・高祖本紀第八）か、『漢書』（巻一・高帝紀第一上）である。猶、『十八史略』（巻二・西漢・漢太祖高皇帝）や『芸文類聚』（巻一〇・符命部符命、巻一二・帝王部二・漢高帝。共に『史記』所引）『太平御覽』（巻八七・漢高祖皇帝）などにも関連する記事が見え、類書にも引継がれている故事で、白居易「漢高皇帝親斬三白蛇一賦」（『白氏文集』巻二二・一四一六）はその故事を詠んだ賦として知られる。

3 喜撰一首

喜撰法師は勅を奉じて和歌式を作り、「吾が廬いはは都みやこの巽たづみ」云々の和歌一首を伝え

ている。

出典は特に必要ないか。敢て挙げるなら『古今集』（仮名序）や『百人一首』の注か。本書本文中の「奉レ勅作二和歌式二」は『千載集』序「宇治山の僧喜撰といひけるなん、すべらぎの詔を承りて大和歌の式を作れりける」他の反映なのかも知れない。猶、喜撰の伝は『本朝歴史』（巻上）や『扶桑隱逸伝』（巻上）にも見え、『扶桑蒙求』（巻上・56喜撰一首）は本書に依る。

4 李翱二句

韓愈の「遠遊聯句」に李翱が「取レ之詎灼々、此去信悠々」と詠んだ句があるが、その二句の後に（韓愈・孟郊は繰返し継ぐが）李翱の句が他に見えないのは、葉夢得によると彼が巧みではなく、韓愈も強いて求めなかったからであると。

出典は『石林詩話』（巻下。宋・葉夢得撰）。本文所引の李翱の二句は『唐詩紀事』（巻三五・李翱）『中山詩話』等にも引かれる。他の詩話関係書からの可能性もある。李翱の伝は『旧唐書』（巻二六〇・列伝第一一〇・李翱）『新唐書』（巻一七七・列伝第一〇二・李翱）に見える。

5 広相幼敏

橘広相は幼少より聡明で書を読み詩文を成した。九歳で昇殿し暮春の即興詩を詠じ、結句に「荒村桃李猶応レ愛、何況瓊林華苑春」と詠む。博学多識で大蔵経を瞬時に閲覽したと言う。参議となり『橘氏文集』がある。

出典は『本朝一人一首』（巻八・377橘広相）か。これを受けた『本朝語園』（巻四・158広相敏速）にも近い。広相の七言二句は他に『江談抄』（第四・102）『史館茗話』（3。但し「桂林華苑」を「九重城裡」に作るは不審）『大東世語』（巻三・夙慧二）等にも引かれ、彼の伝は『本朝儒宗伝』（巻下・橘広相）にも見える。『扶桑蒙求』（巻下・70広相九歳）は本書に依る。

6 李賀少悟

李賀は七歳で詩文をよくするも苦吟した。毎朝馬で出かけ、下人に錦囊ふくろを背負わせて従え、詩句を得るとその中に投入した。暮れ方に戻り、母が袋を探ると詩句で一杯だったので、母は「この子は心肝を吐き出している」と怒った。

出典は漢籍国字解全書第一二巻『古文真宝前集諺解大成』（七言古風短篇「刺二年少」）李長吉所引の注か。但し、李賀の錦囊の故事は李商隱「李賀小伝」（『李義山文集』巻四）以来よく知られた逸話で、『唐詩紀事』（巻四三・李賀）『詩人玉

屑』（巻一五・李長吉）『唐才子伝』（巻五・一一五李賀）の詩話書や『旧唐書』（巻一三七）『新唐書』（巻二〇三・文芸列伝下）の正史、また、『事文類聚』（別集巻九・詩上）『円機活法』（巻一〇・詩人）『潜確居類書』（巻八一・詩歌）『群書類編故事』（巻一五・「李賀錦囊」）『古今合璧事類備要』（巻四四・詩律）等の類書にも広く見える。

7 良基連式

藤原（二条）良基は後光厳・後小松両帝に事えた。幼少より才識があり、『連歌新式』を作り、一条兼良が追加して敷衍し、跋文で応安の新式（良基）を称えている。

出典は『連歌新式追加並新式今案等』か。『扶桑蒙求』（巻下・48良基連式）は本書に依る。

8 陸機文賦

陸機は若くして牙門將軍となり、楊駿に招かれて祭酒・太子洗馬を経て、王穎には司馬・大將軍に任じられた。「文賦」の序に「才士の作を觀るに心中得るところあり。その言辞を發するやまことに變化多く、その好悪を述べる自作には情が表れる……」（以下略）と。

出典は和刻本『六臣註文選』（巻一七・「文賦」）であろう。陸機の説明には上記巻一六所収「歎逝賦并序 陸士衡」下に記された呂延濟注に、『晋書』（巻五四・列伝第二四・陸機）の記事が加味されているか。

9 力雄開戸

天照大神は素戔嗚尊の黒心くろこころを知り天石窟あまのいわやに隠れ、天下は恒闇とこやみとなった。そこで八十萬神は相談し、天鈿女命あまのつめのみことが石窟の前で巧みに舞う。大神がいぶかり磐戸を少し開けたので、手力雄神が大神の手を引出した。神様達は素戔嗚に罪ありとし、髪や手足の爪を抜き追放した。

出典は『日本書紀』（巻一・神代上・第七段）。『日本紀略』（前篇一・神代上）にも殆ど同文が見え、『本朝神社考』（中之三・手力雄）『本朝蒙求』（巻中・73手力（力雄）引手。巻上・108鈿女俳優）もほぼ同じ内容と言えよう。

10 魯陽援戈

韓との戦い酣あはわのところまで日が暮れかかったので、魯陽公は戈をとりさし招く

と、日は三星宿も戻ったのであった。

出典は『淮南子』（覽冥訓。恐らく『淮南鴻烈解』を用いるか）。この故事は他に『芸文類聚』（巻一・日）『初学記』（巻一・日）『事文類聚』（前集巻二・日）『古今合璧事類備要』（巻一・日）『淵鑑類函』（巻二・日）等諸類書にも見える。

11 玉姫繡井

火闌降命（海幸）と彦火々出見尊（山幸）兄弟は互いの生業を換えた。弟は兄の鉤を亡くし責めたてられ、憂えて海畔を行くと塩土翁と出遇い、その助けを得て海神宮に至る。その殿閣は美麗で、門前に井戸があり、豊玉姫の侍者が瓶で水を汲んでいと、井中に人の笑顔が逆さに映っている。そこで仰ぎ観ると、麗しい神（山幸）が杜樹に寄り立っていた。豊玉姫が人を遣り問うと、山幸は来意を述べ、海神は女豊玉姫を妻合わせ、彼は海神宮に三年留まることとなった。

出典は『日本書紀』（巻二・神代下・第十段）。他に『日本紀略』（前篇二・神代下）にもほぼ同文が見え、『本朝蒙求』（巻上・3火折乗鰐、106火進責鉤）の関連記述もある。

12 洛神凌波

曹植は魏武帝の三子で東阿王・雍丘王に封ぜられた。彼は洛水の神を賦に詠じ「美しい薄衣を飄し、長い袖をかざしてたたずむ。その体は飛び立つ鴨よりも軽く素速く、神の如くで、波を踏んでやや歩めば、薄絹の靴下より塵が立つ」とある。

出典は和刻本『六臣註文選』（巻一九・「洛神賦」）。曹植の説明もその李周翰注に依っている。

13 玉依夾矢

玉依姫（賀茂健角身命の女）は瀬見の小河（鴨川）を逍遙し、流れる丹塗りの矢を得る。それを屋上に夾んでしばらくするとみごもり、父不明の男子を生んだ。ある時、里人をもてなし、男子に矢を持たせ、父親に与えよと言ったところ、子は盃を大空に投げ、家を蹴破って天神の子だと言い、天に昇った。これが別雷神であり、丹塗りの矢は松尾大明神である。

出典は『本朝神社考』（上之一・賀茂）。この説話は他に『新日本紀』（巻九・述義五・神武。「頭八咫鳥」の注）『古事記伝』（巻二二）『本朝月令』（四月・中西賀茂祭事。「秦氏本系帳」所引）『伊呂波字類抄』（加・諸社。「本朝文集」所引）に見え、『扶桑蒙求』（巻上・2玉依夾矢）は本書に依る。

14 陶侃得椽

晋の陶侃は潘陽の人で、潯陽に移り住み、早くから孤独で貧しかった。雷沢で漁をしている時、機織の椽を手に入れ、壁に懸けておくと、雷電を受け竜と化して去り、彼は県吏から太尉に至り、長沙郡公となった。

出典は『晋書』（巻六六・列伝第三六・陶侃）と『蒙求』（574「陶侃酒限」）か（略歴部分は『蒙求』で、逸話部分は『晋書』）。

15 浦島垂釣

雄略天皇二二年七月、丹波（丹後が正しい）の餘杜郡管川の水江浦島子は舟で漁をしていて大亀を得た。すると化して女となったので妻とし、共に海に入り蓬萊山に至り仙界を見てまわった。

出典は『本朝蒙求』（巻中・78浦島得亀）。他に『日本書紀』（巻一四・雄略天皇二二年七月条）『日本紀略』（前篇五・雄略天皇二二年七月条）『浦島子伝』『扶桑略記』（第二・雄略天皇二二年七月条）『続伝略抄』所引）『新日本紀』（巻二二・述義八・雄略。「丹後国風土記」所引）『本朝神仙伝』（付）や御伽草子「浦島太郎」、謡曲「浦島」等でも知られ、『日本紀竟宴和歌』（得二浦島子）大江朝望）『河海抄』（巻一五・夕霧。「丹後国風土記」『浦島子伝記』所引）『本朝列仙伝』（巻一・浦島子）等にも見える。『扶桑蒙求』（巻中・2浦島垂釣）は本書に依る。猶、近年の関連本に三舟隆之「浦島太郎の日本史」（吉川弘文館・二〇〇九年）があり、平安朝から中・近世への展開について記している。

16 王質爛柯

晋の樵夫王質は二童子が囲碁するのに出逢う。棗核のようなものを与えられ食べると飢えず、斧を置いて対局に見入る。童子に「お前の斧の柄は腐っているよ」と言われ、彼が故郷に戻ると、知人はいなくなった。

出典は『事文類聚』（前集巻四二・技芸部・碁。「述異記」所引）か。この逸話は有名で『太平御覧』（巻七五三・工芸部一〇・囲碁。「晋書」所引）『田機活法』（巻一〇・樵夫。巻一六・囲碁）『淵鑑類函』（巻三二九・巧芸部六・囲碁三）などの類書に所収され、本朝の歌学書でもよく詠まれる故事として採り挙げられている。平安時代を中心とするものだが近年の論に上原作和『爛柯』の物語史——『斧の柄朽つる物語の主題生成——』（『光源氏物語学芸史』翰林書房、二〇〇六年）、田中幹子「王質爛柯」と「劉阮天台」——中世漢故事変容の諸相——（『和漢・新撰朗詠集の素材研究』和泉書院・二〇〇八年）がある。

17 瓊杵鏡劍

天照大神は葦原中国に子の天津彦彦火瓊杵尊をやり治めさせるべく、八坂瓊曲玉・八咫の鏡・草薙劍の三種の宝物を与えて、天児屋命・太玉命・天鈿女命・石凝姥命・玉屋命の五部神を侍らせ、勅語を下された。

出典は『日本書紀』（巻二・神代下・第九段）。他に『日本紀略』（前篇二・神代下）にも見え、『扶桑蒙求』（巻上・3 瓊杵鏡劍）は本書に依る。

18 夏后溝洫

舜が「堯の事業を成し遂げる者はいるか」と問うと、諸侯は禹が司空になれば立派にやると言うので、水土を治めさせた。禹は益・后稷と共に人夫を集めて全土に配置し、木柱を立てて高山・大川の名を定めた。衣食質朴で鬼神を祀り、田畑の溝作りに費を投じ、陸行には車、水行には船、沼沢には櫓を用いた。

出典は『史記』（巻二・夏本紀第二）。猶、本書本文には欠落がある。即ち「禹拝稽首、讓三於契后稷皋陶」。舜曰「とある後に「女其往視爾事一矣」の一文が必要ならず、それでない」と文意が通らない。

19 衣通喜子

衣通郎女が允恭天皇を恋い、「わが背子が来べき宵なり……」と歌ったところ、天皇は心動かされ、「さらさらがた錦の紐を……」の歌を詠じた。

出典は『釈日本紀』（巻二六・和歌四・允恭）。他に『日本書紀』（巻一三・允恭天皇八年二月条）にも見えるが、『日本紀略』（前篇五・允恭天皇八年二月条）では和歌が省略されている。また、『瓊矛餘滴』（巻上・弟媛光彩）でも同話に言及する（本書巻中「11 弟媛衣通」参照）。

20 楊妃比翼

楊貴妃は初め寿王の妃であったが、美人だったので玄宗は高力士を使って奪い、天宝四年貴妃とした。安祿山の謀反で蜀に逃れる途次、馬嵬で将兵の憤怒に遭い、彼女は力士に縊死され、紫茵に包まれ道傍に埋められた。白居易「長恨歌」の末尾に「在レ天願作比翼鳥、在レ地願為連理枝」とある。

出典未詳。白居易「長恨歌」の注（例えば『古文真宝前集諺解大成』など）と関わるか。他に『新唐書』（巻七六・后妃伝上・玄宗楊貴妃）『楊太真外伝』『楊貴妃外伝』や『事文類聚』（前集巻二一・帝系部・宮嬪）『潜確居類書』（巻七一・芸習七・葬）等の類書にも言及するものがある。本朝では『今昔物語集』（巻一〇・唐

玄宗后楊貴妃依三皇龍一被レ殺語第七）『唐物語』（第一八・玄宗皇帝と楊貴妃の語）『太平記』（巻三五・北野通夜物語の事附青砥左衛門が事。巻三七・畠山入道誓謀叛附楊国忠が事）『楊貴妃物語』（寛文三年（一六六三））や謡曲「皇帝」「楊貴妃」等でもよく知られている。

21 天武五節

天智崩御後、大友皇子が挙兵するや、天武は吉野瀧宮に逃れた。彼が弾琴していると神女が降臨し五曲歌舞して去った。これを五節の舞と言う。天武は清見原宮で即位し、後世大嘗祭では五節の舞を奏する故事となった。

出典は『本朝蒙求』（巻上・10 乙女節舞）。猶、この故事の関連記事は『江家次第』（第一〇）『政事要略』（巻二七・年中行事。『本朝月令』所引）『江談抄』（第一・11 淨御原天皇始三五節一事）『袋草紙』（希代歌）『年中行事秘抄』（十一月・五節舞姫参入并帳台試事。『本朝月令』所引）『公事根源』（十一月・五節）『十訓抄』（第一〇・18 五節の舞の起源をとめごの歌）『源平盛衰記』（第一・五節の夜の闇打附五節の始め並周の成王臣下の事）『河海抄』（巻九・乙通女。『本朝月令』や三善清行「意見封事」、『寛平御遺誠』等所引）にも見える。『扶桑蒙求』（巻上・14 天武五節）は本書に依る。

22 太宗七徳

七徳舞は秦王破陣楽ともいい、唐太宗が秦王の時に劉武用（周が正しい）を破った時に作ったもので、即位後は功業を忘れぬよう宴会で必ず演奏させた。彼は武功により興ったが、文徳により国内を安んじた。七徳舞の図も製り、樂工二二〇人に銀甲を着せ、戟を執らせて舞わせ、三変するたびに四陣を成さしめた。

出典は『新唐書』（巻二一・志第一一・礼樂一一）か。また、『旧唐書』（巻二八・志第八・音樂一、二）『十八史略』（巻五・唐・太宗文武皇帝七年）『樂府詩集』（巻九七・新樂府辞八）『測鑑類函』（巻一八六・樂部三・舞二）などにも関連記事が見え、『白氏文集』（巻三）新樂府冒頭に「七徳舞」詩が挙げられていることもよく知られている。

23 青砥牛渡

青砥藤綱は父の命に依り幼時に僧となるも成人後には還俗し学問をしたが、仕官の手蔓がなかった。平（北条）時頼の三島明神詣の折、官物を負う牛が片瀬川で小便をしたので、彼は「この牛と時頼公のやることは同じだ」と嘲笑した。この年は

日照りで凶作となったが、牛は田畑に小便せず、あふれる川の中でした。それは、時頼公が国中の貧困の者に施すことなく富裕な僧どもに布施するのと同じだと言った。時頼がその才器を知り施政に参加させると、彼は忠勤を尽くし一世の人傑とされた。

出典未詳。藤綱の故事と言えば巻中(109藤綱買炬)のものが有名。『扶桑蒙求』(巻下・33藤綱牛渡)は本書に依る。

24 阿臚雞肋

魏の曹操は漢中郡を平定し、教(命令)を出したが、ただ一言「雞肋」のあるだけで、誰も意味が解せなかったが、ひとり楊脩のみ、雞のあば骨は食べても得るところないが、捨てるには惜しいという意味だと言った。

出典は『蒙求』(219「楊脩捷対」)。本文の引用の仕方を見ると『後漢書』(巻五四・列伝第四四・楊脩)と『三国志』(巻一・魏書・武帝紀第一)に依るようにも見えるが、『蒙求』で事足りるか。末尾の「帝小字阿臚」は例えば『曹臚伝』にも見えるが特に出典を要することではないだろう。

25 彦火乘鰐

兄の鉤を亡くした彦火々出見尊は塩土翁の導きで海神の宮に至り、豊玉姫と結婚。三年を経て帰る時、鯛女の口から鉤を得、二種の宝物(潮満瓊と潮涸瓊)と教えを授かり、一尋の鰐魚に乗って戻り、海神の教えに違つてことを行った。

出典は『日本書紀』(巻二・神代下・第十段)。他に『日本紀略』(前篇二・神代下)『先代旧事本紀』(巻六・皇孫本紀・彦火々出見尊)や『本朝蒙求』(巻上・3彦火乘鰐。巻中・114塩土投櫛)などとも関連するところある。『扶桑蒙求』(巻上・6彦火乘鰐)は本書に依る。

26 簫史逐鸞

簫史は好んで簫を吹き、秦の穆公は娘の弄玉を妻合わせた。弄玉に簫を吹かせる時、鳳が屋に来り止まったので、公は鳳台を築いた。弄玉は鳳に、簫史は龍に乗って昇天した。

出典は定め難いが『太平広記』(巻四・簫史)『神仙伝拾遺』(所引)に近い。この故事は『芸文類聚』(巻四四・簫。巻七八・仙道。巻九〇・鳳)『初学記』(巻一六・簫。巻一九・美婦人)『蒙求』(535「簫史鳳台」)『太平御覧』(巻一五四・公主下。巻一七八・台下。巻五八一・簫。巻九一五・鳳)『事文類聚』(続集巻二

三・簫)『古今合璧事類備要』(別集巻一六・簫。前集巻五〇・神仙)『金壁故事』(巻二・吹簫猶聽鳳凰声)『円機活法』(巻一七・簫)『測鑑類函』(巻七九・管。巻二九〇・簫二)といった類書や『文選』(巻三一・江淹「雜体詩三十首」其二所引李善注)などにも見え、その引用書名の殆どは『列仙伝』である。

27 神武宿祢

神武帝代に宇摩志麻治命が天の瑞宝を奉り、神楯を齎し、今木を立て、布都主の剣の大神に五十櫛をさしめぐらして殿内をまつり、十宝を収蔵し、宿直して足尼と号した。足尼は宿祢にも作る。

出典は『先代旧事本紀』(巻七・天皇本紀・神武。巻五・天孫本紀・弟宇摩志麻治命)。猶、『扶桑蒙求』(巻上・7神武宿祢)は本書に依る。

28 黄帝雲官

黄帝(軒轅)は有熊国の君少典の子で、母は電光が北斗七星の第一星をめぐるのが見て感じ彼を生んだ。炎帝の代に戦乱となり軒轅が征伐し、蚩尤と涿鹿の野に戦い捕虜とし、炎帝に代わり天子となり、雲の字を官に付けて雲師とした。

出典は『十八史略』(巻一・三皇・黄帝軒轅氏)。関連記事は本書巻下(66蚩尤涿鹿)、『芸文類聚』(巻二一・黄帝軒轅氏)『帝王世紀』(所引)『初学記』(巻九・総叙帝王)『帝王世紀』(所引)以下の類書などにも見える。

29 時平同車

藤原時平は容姿閑雅・才学秀傑であった。従父の経国(国経が正しい)の夫人在原氏は二十歳程の美艷で、夫の老醜を嫌悪していた。それを知った時平はその邸をしばしば訪れ詠吟絃歌して交遊を持つようになった。主人が贈物をしたと言うと彼は常ならぬ物をと期待し、酔った翁が夫人を差出したので、時平はかき抱き車に載せて帰った。翁は酔いからさめて後悔した。

出典は『今昔物語集』(巻二二・時平大臣取三国経大納言妻一語第八)か。他に『世継物語』やそれを引書とする『本朝語園』(巻八・383時平奪三国経之妻)あたりにも詳しく見え、『十訓抄』(第六・可レ存三忠信廉直巨一事・23時平と国経大納言の室)にも略記されて、『百人一首一夕話』(巻三・菅家)では時平濫行譚として採挙げられている。

30 齊莊賜冠

襄公二五年五月、齊の崔杼は主君の光を殺した。齊の棠公の妻は東廓偃の姉である（偃は崔に仕えていた）。棠公が死ぬと崔が娶ったが、莊公が彼女に足繁く通った。そこで崔の帽子を人に与えたので、近侍の者が止めると、「崔でなくても帽子はいるさ」と勝手に振る舞った。

出典は『春秋左氏伝』（襄公二五年）。

31 直幹晞顔

文章博士橋直幹は天曆八年に民部大輔兼任を請う表を奏上した。天皇は侍臣に読ませたが、その文言に顔をくもらせ、何度か誦し、優れた文士がこのように沈窮しているのは朕の過ちだと嘆き、即日民部大輔に任じた。この上表文は小野道風に浄書させたもので、帝は「二絶」として珍重し、天徳四年の火災の時には持ち出したかどうか左右の者に問うた。

出典は『史館考話』（六二話）か、それをもとにした。『本朝語園』（巻五・224天曆帝問直幹之上書）であろう。この逸話は『十訓抄』（第一〇・可庶二幾才能芸業一事・29橋直幹の依人而異事文）『東斎隨筆』（人事類四・28）『古今著聞集』（巻四・文学第五・141内裏焼亡の折村上天皇直幹が申文を惜しみ給ふ事）や『直幹申文絵詞』にも見え、文中に引用される申文は『本朝文粹』（巻六・150。天曆八年八月九日付）に所収され、その摘句は『和漢朗詠集』（巻下・草437）にも引かれる。また、本書の後にもこの逸話は『大東世語』（巻二・文学7）『本朝世説』（巻上・文学35）等に採られ、『扶桑蒙求』（巻中・69直幹二絶）は本書に依る。猶、直幹は説話のように民部大輔に任じられることはなかった。

32 李白識韓

李白が荊州刺史韓朝宗に与えた書に言う。天下の談論の士は万戸侯に用いられるよりは、韓荊州に見知られたらというが何故か。彼が周公の風を以て処し、国内の賢士を引きつけるからであり、その面識をうれば声価を十倍にすることもできるからだ。だからまだ世に出ぬ者はかれに見定められたいと思う。彼は平原君のように驕らず、恵まれぬ人を疎略にせぬから門客三千中には毛遂のような者も出、機能を顕すであろう。

出典は『古文真宝後集諺解大成』（巻一〇・書類）。韓朝宗の説明もその注に依っている。猶、この李白の書は『書言故事大全』（巻六・瞻仰類）にも引かれている。

33 維盛鳥噪

治承四年、伊豆蛭島の源頼朝が平家を討つべく挙兵した時、平清盛は、維盛を軍將とし、忠度・忠清や齊藤実盛を付け七万の兵を遣した。富士川に陣を張ったが、源氏軍二十万と聞き、戦意を失い、水鳥の飛び立つのを敵兵の声と勘違いして、戦具を放り出し遁走した。

出典は『平家物語』（巻五・平家東国下向、富士川）か、『源平盛衰記』（巻二・三・源氏隅田河原に陣を取る事）実盛京上り附平家逃げ上る事）であろう。このこと『吾妻鏡』（巻一・治承四年一〇月二〇日条）にも見える。また、『扶桑蒙求』（巻中・33維盛鳥噪）は本書に依る。

34 符（符） 堅鶴唳

秦が晋を攻め、謝石・謝玄は軍勢八万で防戦した。秦の符（符が正しい）堅が寿陽城から敵軍を見ると、晋軍に乱れなく八公山の草木まで晋兵に見えたので、皆嘆き恐れた。秦軍が肥水近くに敷陣。玄は堅に、貴軍が少し退き、わが軍が川を渡ったら決戦しようと言案した。堅は晋の渡河を急襲しようとして受け入れたが、一度退却し始めた秦軍は歯止めがきかなくなり、朱序（晋臣で秦の捕虜となっていた）の「秦軍敗れたり」の声で総崩れとなり、逃げる秦兵は風音や鶴声を晋兵の声かと思つた。

出典は『十八史略』（巻四・東晋・孝武帝）。猶、関連記述は『晋書』（巻九・帝紀第九・孝武帝。巻七九・列伝第四九・謝安付載。巻一一三・四・載記第一三）四・苻堅上、下）にも見える。

35 兼季菊亭

今出川兼季は今出川に住み、後醍醐帝に仕えて右大臣を拝した。菊花を庭に植えて愛し、時節に賞翫したが、菊の庭と称し、傍に亭を作って菊亭と号した。

出典は『本朝蒙求』（巻下・10兼季菊庭）。他に『繪本故事談』（巻三・兼季）『扶桑蒙求』（巻中・10兼季菊亭）『瓊予餘滴』（巻上・兼季菊亭）などにも受け継がれている。

36 謝玄蘭砌

謝玄は年少の頃から賢かった。叔父の謝安が子や甥達に話しかけ「君らは私に何の利害もないが、ただ立派な人物にさせたい」と言うと、玄だけが「譬えて言えは庭先に芝蘭や玉樹を茂らせるといふことですね」（芝蘭や玉樹は鑑賞に足るが役に

は立たぬ意を含む」と答えた。

出典は『潜確居類書』(巻五九・人倫一二・子嗣。『晋書』所引)。他に『晋書』(巻七九・列伝第四九・謝安付載)『世説新語』(言語篇・92話)や『芸文類聚』(巻八一・蘭)『初学記』(巻二七・蘭)『円機活法』(巻一八・芝)等の類書にも引かれている。

37 義興驅雷

新田義興は父義貞戦死後弟と共に越後に赴き築城。武・野州に逃亡した兵達は密盟書を作り新田氏に献じたので、義興は武州に進軍した。事は鎌倉に知られ、畠山道誓は不安に思い竹沢良衡と密謀し、彼を義興のもとに送った。義興は初め彼を疑うも、竹沢は美女を進め媚び諂いとり入って、密謀作戦にも関与するようになる。遠江守堯寛と共に竹沢は矢口渡やぐらわたで義興を討とうと、予め偽り舟底に穴をあけさせた。義興は川の中ばで術中に落ちた事を知り自刃する。事の次第を管領足利基氏に知らせると所領を与えられた。堯寛が新封地に行く途上、矢口渡を通ると、一天忽かにかき曇って雷鳴逆浪起こり、義興が龍馬に跨り来り、彼に大きな矢に射抜かれると思うや落馬し悶絶して後に叫死した。

出典は未詳。『本朝蒙求』(巻中・23竹沢穴舟)や『太平記』(巻三三・新田左兵衛佐義興自害事)などと関わる部分も多いが、それ以外の資料も参看しているか。当時は平賀源内の『神靈矢口渡』あたりでも話柄はよく知られていたであろう。

38 伯有作厲

鄭の人の間で伯有の名で驚かすことがはやり、「伯有が来たぞ」と言うと言と皆逃げ隠れた。刑書が彫られた年の二月、伯有が甲冑姿で歩きまわり「壬子に帯を殺し、明年壬寅には段を殺す」と言う夢をある人がみた。すると、駟帯が壬子に、公孫段が壬寅に死んだ。

出典は『春秋左氏伝』(昭公七年条)。

39 内侍好賢

弁内侍が聖賢障子を見て「本朝の忠臣孝子を扱ひ図いたら忠孝の勧めになるでしょうに、扱ふ御代がなかったのね」と言うと、帝は感嘆し、女位を賜ったが彼女は固辞した。

出典は『本朝蒙求』(巻上・61内侍嘆絵)。そのもとは『倭論語』(巻七・貴女部・弁内侍)に見え、『扶桑蒙求』(巻下・8内侍好賢)は本書に依る。

40 充容諫帝

唐の充容徐氏は誕生五ヶ月で話し、四歳で經典に通じ、八歳で詩文を作った。貞観二二年、軍事・宮室築宮が行われたが、百姓は疲弊していたので、徐氏は上書して諫めた。「古人の云う、休むと雖も休むなかれとはまことに理由があるのだ」と。太宗はその言を嘉し優賜を加えた。

出典は『旧唐書』(巻五一・列伝第一・后妃上・賢妃徐氏)。他に『新唐書』(巻七六・列伝第一・后妃上・徐賢妃)にも見える。

41 廢戸龍車

斑鳩宮に夢殿という淨殿があり、聖徳太子は入るたびに沐浴して諸経疏を作られた。疑念ある時夢殿に入ると、東方から金人が来り深義を論じた。推古天皇一六年九月、太子が夢殿に一七日間籠ると不審がられたが、慧慈は「太子は三昧に入られた」と言った。八日目の朝、机上に一卷あり、太子が慧慈にこれはわが先身の所持本で、小野妹子が持ち帰ったものはわが弟子の經典であると言う。一七年九月、隋使が来日し、去年の秋に皇太子が青龍の車に乗り、南嶽の旧房の經典を取るや空に上がり飛び去った、と言った。

出典は『元享釈書』(巻一五・方応八・聖徳太子)。他に『聖徳太子伝略』(下・推古天皇一六年九月条)『扶桑略記』(第四・推古天皇一六年九月条)『日本往生極楽記』(聖徳太子)『法華経験記』(巻上・第一伝灯仏法聖徳太子)『今昔物語集』(巻一一・聖徳太子於此朝一始弘三仏法一語第一)『三宝絵』(中巻・聖徳太子)などにも見える。『扶桑蒙求』(巻上・20廢戸龍車)は本書に依る。

42 李靖馬駿

ある夜李靖が一軒の巨宅に泊ろうとすると老婦が手を引いた。夜中に急に門を叩く音がするや、婦は顔色を変え「自分は龍女で、二人の子は共に外出中だ。天命に依り雨を降らせなければならぬが、お助け願いたい」と言い、小さな瓶を出し馬の鞍に懸けて言った。「馬がはねて嘶いたら瓶の水一滴を馬のたて髪に垂らしなさい。決して多く垂らさぬように」と。雲間に稲妻が光り、村が見えたので二十滴も垂らして帰ると、老婦は「一滴の水は地上では三尺じゃ。この村は夜半に三丈の水の中だわさ」と言った。

出典は『円機活法』(巻一・天文門・雨)。他に『太平広記』(巻四一八・龍一・李靖)『事文類聚』(前集巻五・天道部・禱雨)『群書類編故事』(巻一・馬上行雨)『測鑑類函』(巻七・雨)等の類書や『古今説海』(説測三三)『李衛公別伝』所引

にも見える。

43 康頼木塔

平康頼・藤原成経・俊寛は平家滅亡を密謀するも発覚。清盛は康頼等を鬼界が島に流す。康頼は孝誠な人で、熊野権現や諸神諸仏に祈り、都の老母を慕い姓名と和歌二首を刻んだ小塔婆千本を作り波上に投じた。その一本が安芸厳島で拾われ母に届けられた。人々はその孝心が招いたものとし、後に赦され帰京した。

出典は『平家物語』（巻一・成親大将謀叛、巻二・成親流罪・少将流罪、三人鬼界が島に流さるる事）か、『源平盛衰記』（巻四・鹿谷酒宴静憲御幸を止むる事、巻七・信俊下向の事、康頼卒塔婆を造る事）であろうか。この逸話は『本朝蒙求』（巻中・29康頼流歌）『本朝語園』（巻二・77康頼流三卒都婆二）にも見え、『扶桑蒙求』（巻上・49康頼木塔）は本書に依る。猶、平康頼は帰京後『宝物集』を著し、鬼界が島のことも記している。

44 杜孝竹筒

杜孝は幼くして父を失い、母と暮らし孝行を称された。彼が成都に居る時、生魚を好んだ母を思い、竹筒に魚を入れ「母さんが必ずこれを手にしますように」と願って川に流したところ、妻が手にして夫の所為と思ひ、煮て母に進めた。

出典未詳。この説話は『勸懲故事』（巻一・「思母寄魚」）『孝順事実』（所引）『湖鑑類函』（巻三二八二・筒二・「盛魚」）『広輿記』（所引）などにも見えている。

45 護良匠函

後醍醐帝の皇子護良親王は初め僧となり尊雲と号したが武勇を好む人であった。

元弘元年父帝が笠置山で東軍の將兵に囲まれた時、親王は般若寺に在り、好尊の五百の兵を前に進退きわまり、堂内の一經函に身を匿した。士卒乱入するもうまくかわして発見されずに危機を免れ、寺を脱出して徒弟らと九人で微服して南紀の十津河に到り、竹原某を頼り半年潜んだ。

出典未詳。この逸話は『太平記』（巻五・大塔宮熊野落事）に依るとみるべきかも知れないが、書出し部分の記述には『本朝蒙求』（巻下・80護良擒戮）と一致する処もある。『扶桑蒙求』（巻上・52護良甲冑）は本書からの抄出。

46 庾水伏篷

蘇峻の乱の時、庾一族はちりぢりに逃亡した。庾水は当時呉郡太守であったが、

兵卒が彼を竹むしろで隠して小舟に乗せ、錢塘江河口に脱出し、山陰の魏家に身を寄せた。乱後水は兵卒に恩返しに望みを叶えてやると言ったところ、「酒さえあれば満足だ」というので、邸宅を建て百斛の酒がきれないようにしてやった。

出典は『世説新語』（任誕第二三・30話）。

47 春王被底

足利義満の幼名を春王という。細川清氏・楠正儀が都を陥れた時、彼は東山の僧良芳の衣被中に匿われること五日。良芳は赤松則祐と嘉みがあったので輿に乗せて播州白旗城に到り迎えられた。その時春王は四歳だった。

出典は『本朝蒙求』（巻上・52春王匿被）。他に「弘宗定智禪師行状」（『弘宗定智禪師譜録』）にも見え、『扶桑蒙求』（巻下・14春王被底）は本書に依る。

48 趙武袴中

春秋の代に晋に事えた趙夙は成子襄（衰が正しい）を生み、襄（衰）は宣子盾を生み、盾は朔を生み、朔は成公姉を夫人とした。屠岸賈は朔一族を滅ぼし、朔の落とし種の武も搜索されたが、夫人の袴の中に匿われた。「趙一族が減びるなら泣け、滅びないなら声をたてるな」と婆が祈って言うときと竟に声を立てなかった。

出典は前半が『十八史略』（巻一・春秋戦国・趙）、後半が『史記』（巻四三・趙世家第一二）を利用したものかと思われる。

49 将門百官

平将門は承平二年伯父平国香を攻殺し、下野に入つて国司を追い出し、更に上野・武蔵・相模・上総・下総を支配下に置き、下総の猿島の石井郷を都と定め、自ら「平親王」と号した。百官を整備したが、暦博士のみ欠いた。天慶三年官軍に滅ぼされた。

出典は『日本古今人物史』（巻三・逆臣伝・1平将門）。猶、将門の乱の顛末は『将門記』『扶桑略記』（第二五・天慶二、三年条）『今昔物語集』（巻二五・平将門発二謀反一被誅語第一）など諸書に見える。『扶桑蒙求』（巻中・64将門百官）は本書からの抄出。

50 趙倫九錫

賈后は、実子ではない皇太子適を廢し殺した。趙王の倫は詔と詐り兵を率いて宮中に入り、賈后・張華らを殺し相国となった。倫は天子が功臣に賜る九物を自分に

与え、帝に讓位させた。彼の一味は大臣・宰相となり、卑位の者にも爵位が与えられたので、朝会には貂蟬の冠があふれ、「貂の尾が足らず、犬の尾で冠を飾っている」と嘲笑された。齊王・成都王・河間王が挙兵し、倫は誅された。

出典は『十八史略』(巻三・西晋・好惠皇帝)。猶、趙王司馬倫の伝は『晋書』(巻五九・列伝第二九・趙王倫)に見える。

51 敦光間(閑)花

藤原敦光は経史に通じ作文に優れ、行歩の間にも古文を誦して儒雅を称された。上世の歌仙柿本人麻呂の画像に讚し、銘と序を作った。また、大江匡房の旧宅に立ち寄り、「往事渺々共誰語、閑庭唯有三不言花二」の一聯を伝え、その句は藤原良経『詩十体』幽玄部にとられている。

出典は『本朝語園』(巻四・166敦光過三江師旧宅一・167敦光讚二人磨二)か。人磨讚と江師の旧宅を過る逸話は『古今著聞集』(巻五・和歌第六・36修理大夫頭季人丸影供を行ふ事。巻一三・哀傷第二二・5藤原敦光江師匡房の旧宅を過ぐとて秀句を作る事)に見えている。猶、「柿本朝臣人磨画讚并序」は『本朝統文粹』(巻一一)『朝野群載』(巻一)に所収され、その行事関連については前記の他に『柿本影供記』『十訓抄』(第四・可レ誠三人上多言等一事・2粟田兼房及び頭秀卿の人丸画像)などにも見えてよく知られ、『扶桑蒙求』(巻下・62敦光賦花)は本書からの抄出である。

52 向秀隣笛

向秀(子期)は心清く理に通じて先見の明があり、山濤の知人だった。老荘の学を好み、『莊子』の注解を著してその深遠な趣旨を明らかにし、読む者もよく理解できた。かくて郭象が祖述し広めて道家の言が盛んとなった。彼は嵇康の鍛冶の助手となり、気心も合ったから二人で楽しんでいたが、康が殺されると秀は洛陽に上り彼を追慕した「思旧賦」を作った。序に「嵇康は多くの技芸に優れていたが、特に琴曲に優れていた。……その昔(康が)住んでいた処を通りかかると、日も沈みかかり、寒水凄然たる下、隣家に笛吹く者があり、康と共に宴遊した昔が想起されてならず、嘆息して賦を作った」と記している。

出典は『蒙求』(117「向秀隣笛」)。猶、上書の出典である『晋書』(巻四九・列伝第一九・向秀)にも見え、「思旧賦」は『文選』(巻一六)にも所収される。

53 覚明移書

木曾義仲の侍史覚明は初め興福寺の僧であった。治承年間に園城寺で茂仁親王の令旨を奉じ南都に牒状を送った時の返書を書いたのは彼で、文中で「清盛は平家の塵芥、武家の糟糠」と表現した。清盛は怒り殺そうとするが、覚明は逃げて義仲の臣となった。

出典は『日本古今人物史』(巻七・10覚明伝)。覚明のこの逸話は『平家物語』(巻七・木曾の願書『源平盛衰記』(巻二九・新八幡願書の事)にも見え、『本朝蒙求』(巻下・43道広立成)にも採られている。

54 陳琳作檄

陳琳は冀州に避難していた時、袁紹の下で文章を作し、檄を以て劉備に告げ「曹公徳を失す。依附するに堪えず、宜しく本初(袁紹の字)に帰すべし」と。紹が敗れると彼は曹操に仕えた。操が彼に「わしを責めたのは仕方ないが、何故わしの父祖まで引合いに出したのか」と問うと、彼は「矢がつかえられているのですから、射ないわけには参りませんでした」と答えた。操は彼の才を愛し責めなかった。「典略」に言う、琳が操に檄などの草稿を見せると、寝込む程の頭痛の苦しみも癒えた。

出典は、前半が和刻本『六臣註文選』(巻四四)所収の「為三袁紹一檄二豫州」の作者名(陳孔璋)下に引かれる李周翰注、後半は『蒙求』(592「陳琳書檄」)を利用したもので、『潜確居類書』(巻八一・文章)にも採られている。

55 宗高射扇

那須宗高は弓の名人で義経の八(屋)鳥の合戦に従い、平家軍の船上で美女がかざす扇の的を射落し名声を残した。

出典は『日本古今人物史』(巻七・八那須宗高伝)。もともとは『平家物語』(巻一一・扇の的)『源平盛衰記』(巻四二・屋島合戦附玉虫扇を立て与一扇を射る事)でよく知られ、『本朝蒙求』(巻下・118宗高射的)や本書の影響を受けた『絵本故事談』(巻五・那須与一)『扶桑蒙求』(巻中・38宗高射扇)にも採られ、明治の『瓊矛餘滴』(巻中・与一射的)にも漢文化され所収される。猶、与一伝説案内の近刊書に山本隆志『那須与一伝承の誕生——歴史と伝説をめぐる相克——』(ミネルヴァ書房・二〇一二年)がある。

56 史慈植的

孔融が黄巾の賊に囲まれた時、太史慈を使にやり平原に助けを求めた。慈は両騎を連れ、各々に一本の的を持たせて、門を出て的を立て、敵の見守る中で射た。明朝以後もこれを繰返したので、慣れて見る者もなく、そのスキをつけて囲みを脱出した。

出典は『三国志』（巻四九・呉書四・太史慈伝第四）。

57 狹穂積稲

狹穂彦王は垂仁天皇四年九月に謀反を起こした。彼は妹の皇后狭穂姫に「容色衰えたら帝の寵愛も失われ将来に期待は持てないが、兄が帝位に就いて共に天下を治めたら愉快ではないか。兄の為に天皇を殺せ」と言い口を授けたが、姫は兄の反意を帝に告げ、上毛野八綱田が討伐することになった。狹穂彦は稲を積んで城を作ったが、それを稲城と言った。

出典は『本朝蒙求』（巻上・23穂彦積稲）。もともとは『日本書紀』（巻六・垂仁天皇四年九月、一〇月条）や『日本紀略』（前篇四・垂仁天皇四年九月、一〇月条）『水鏡』（巻上・垂仁天皇）にも見える故事で、近世に入っては『本朝列女伝』（巻一・1狭穂姫）『本朝蒙求』『本朝世説』（巻下・賢媛1）や本書の影響を受けた『扶桑蒙求』（巻上・11狭穂積稲）にも採られる。

58 禄山動鑿

天宝一四年、安禄山は十餘万の兵を率いて漁陽を発し南下して楊国忠を誅すと詭り、進軍太鼓の音をとどろかせた。

出典は『古文真宝前集諺解大成』（歌類・「長恨歌」）。有名な「漁陽鼙鼓動地来」の一句の注を引いたもの。安禄山の乱は『旧唐書』（巻九・本紀第九・玄宗下。巻二〇上・列伝第一五〇上・安禄山）『新唐書』（巻五・本紀第五・玄宗。巻二二上・列伝第一五〇上・安禄山）『十八史略』（巻五・唐玄宗明皇帝）といった史書の記述も知られるが、ここでは煩瑣な記述を避けた。

59 允恭採蠶

允恭天皇は淡路島で獵し、一獣も得られなかった。島の神が明石の海底の真珠を供えれば獵果が得られるというので探らせたところ、男狭磯という海人が死を賭して大きな蠶をもたらず。中には桃の実程の真珠があり、それを供えて多くの獣を得ることができた。

出典は『日本書紀』（巻一〇・允恭天皇一四年九月条）。他に『日本紀略』（前篇

五・允恭天皇一四年九月条）『扶桑略記』（第二・允恭天皇一四年九月条）にも見え、『扶桑蒙求』（巻上・17允恭採蠶）は本書の抄引。猶、題中の「蠶」は珠を宿す貝（ドブガイの類とも）として文中の蠶（蝸・鮑・鰻も同じ）と通用していると思われる。

60 温嶠然犀

晋の温嶠は牛渚磯の深さは測り知れぬと思った。世間では怪物が多くいると言うので、彼が犀を燃やして水を照らしたところ、奇形異様なものが見えた。夢中に現れた人が「君とは世界が違う。思いも及ばぬだろうよ」と言った。

出典は『群書類編故事』（巻三・「燃犀照水」）か『円機活法』（巻二四・犀。「照水族」）である。猶、この逸話は『晋書』（巻六七・列伝第三七・温嶠）にも勿論見えるが、『太平広記』（巻二九四・温嶠）『事文類聚』（前集巻一七・衆水。「燃犀照水」）『測鑑類函』（巻四三〇・犀三。「晋書」所引）といった類書にも援用されている。

61 忠盛出勢

平忠盛は桓武帝の子孫。武の備えあり、長寿院宮構の費を献じて但馬守となり四位昇殿するが、公卿達に妬まれ、五節の夜宴での闇打ちを事前に察知して難を免れた。公卿らは「伊勢瓶子（平氏）は醋瓶（片目）なり」と嘲し立てたが、平氏の出自が伊勢で、忠盛は生まれつき眇目だったことに依る。

出典は『平家物語』（巻一・平家繁盛並徳長寿院導師の事、五節の夜の闇打ち、兼家季仲基高家継忠雅等拍子附忠盛卒する事）に依るか。『扶桑蒙求』（巻下・10忠盛出勢）は本書の抄出。

62 郤克聘齊

季孫行夫は頭髮がなく、晋の郤克はすがめ、(衛の)孫良夫は足萎えで、(曹の)公子手はせむしだったが、同時に齊に招かれ、各々に見合った迎使が立てられた。蕭の同叔の公女（齊侯の生母）が殿上で彼らを笑ったので、彼らは立ち去ってしまったが、齊の人達は「この国の患いはきつとこれに始まる」と言った。

出典は『春秋左氏伝』（巻一三・成公元年）。

63 肖柏夢菴

肖柏は和歌を嗜み宗祇や東常縁に学び風雅を窮め、漢籍も読んだ。後柏原帝に召されて連歌をし、御製も載せ百句に至ったので、帝は嘉し天盃を下賜した。摂津の池田に小菴(夢菴)を構えて花を植え、牡丹花と自称した。官儒を事とせず仏法にも耽らず、酒・香・花を愛し、常菴龍崇に「三愛記」を作らせた。

出典は『本朝蒙求』(巻中・46肖柏三愛)。他に『絵本故事談』(巻七・肖柏)『扶桑蒙求』(巻下・89肖柏夢菴)などにも継承される。

64 柳子愚溪

柳宗元「愚溪詩序」に「灌水の北に溪あり。東流して瀟水に入り……冉氏嘗て居る。故に是溪に姓し冉溪と曰ふと。或いは曰く、以て染むべきなり……之を染溪と謂うと。余愚を以て罪に触れ、瀟水の上に謫せらる。是の溪を愛して入ること二三里、其の尤絶なるを得てここに家す。……故に愚溪と為す。……愚邱より東北に行くこと六十歩に泉を得たり。……愚泉と為す。愚泉は凡そ六穴あり。……南するを愚溝と為す。……その隘を塞ぎて愚池と為す。愚池の東を愚堂と為し、其の南を愚亭と為し、池の中を愚島と為す」云々とある。

出典は『柳河東集』(巻二四)。後に清・沈德潜『唐宋八家読本』(巻八)に所収。

65 長髓孔舎

神武天皇戊午年四月、皇軍は龍田に向かうも路が狭峻で、東の生駒山を越え中洲に入ったが、長髓彦は「我が国を奪うつもりだ。孔舎衛の坂で迎え討つ」といい合戦となった。五瀬命が流弓を受けるなどして皇軍は進軍できずにいたが、一二月に一天かきくもり氷雨が降り、金色のトビが飛来して皇弓に止まるや流電を放ち、長髓彦軍を眩惑して戦意を失わせた。

出典は『日本書紀』(巻三・神武天皇即位前紀戊午年四月、一二月条)。他に『日本紀略』(前篇三・神武天皇即位前紀)にも見え、『扶桑蒙求』(巻上・83長髓孔舎)は本書の抄出。

66 蚩尤涿鹿

蚩尤が反乱を起こした。彼は銅鉄の額で大霧を起こすことができた。これに対し黄帝は指南車を作り、蚩尤と涿鹿の野で戦い、これを捕えて炎帝に代わって天子と為った。

出典は『十八史略』(巻一・三皇・黄帝軒轅氏)。本書巻下(28黄帝雲官)も参照。

猶、黄帝・蚩尤の涿鹿の野での合戦は『史記』(巻一・五帝本紀第一)にも見える。

67 武内棟梁

武内宿祢は景行帝の五年八月に棟梁の臣となり、成務帝三年には大臣となり、仁徳帝の時に薨じた。年は三百餘歳であった。

出典は『本朝蒙求』(巻上・22武内棟梁)。猶、関連記事は『日本書紀』(巻七・景行天皇五年八月四日条、成務天皇三年正月七日条)『尊卑分脈』『水鏡』(巻上)『日本紀略』(前篇四・景行天皇、成務天皇)『公卿補任』(薨去年齢を二九五歳とする)などにも見え、『本朝語園』(巻二・五九武内大臣位三六朝)は諸書の没年齢の違いに言及し、『絵本故事談』(巻二・武内宿祢)は本書より丁寧に記述する。

68 郭儀福祿

郭子儀は一身に天下の安危を荷うこと三十年、功業は偉大で帝にも信用され、人臣の位を極めたが誰にも嫉まれなかった。魏博(の田承嗣)に使いをやり、田は四方を押し「人に膝を屈げたことはなかったが、今郭公の為に拝礼する」と言った。中書令以後の最優秀勤務評定は二四回であった。家族は三千人で、八子七婿すべて頭官に就き、孫も数十人いた。

出典は『十八史略』(巻五・徳宗皇帝)。猶、郭子儀の伝は『旧唐書』(巻一二〇・列伝第七〇)『新唐書』(巻一三七・列伝第六二)に見える。

69 陽勝叡果

母が太陽を呑む夢をみて陽勝は生まれ、天慶三年一歳で叡山に登り、空日に師事し、聡明で慈愛に富む人であった。禪定を修し精進して、後に夏は金峯山、冬は牟田寺に住した。仙方を習い、穀を断つて菜蔬を食ひ、次に菜を去って果蔬(木や草の実)を食べ、粟一粒を食したとも言ひ、薛蘿を着て、延喜元年俗世を去り行方をくりました。病む父が会いたいと願うと訪れて『法華経』を誦したが、姿は見えず声のみだった。毎月十八日に焼香散花すれば、誦経説法にやってくると伝えたのだ。

出典は『元亨釈書』(巻一八・願雜三・神仙)。陽勝のことは他に「陽勝仙人伝」(高山寺古鈔本)『本朝神仙伝』(陽勝仙人の事第一八)『日本高僧伝要文抄』(巻一・陽勝仙人伝)『扶桑略記』(巻二三・延喜元年八月条。巻二四・延長元年七月条)『法華験記』(巻中・第四四・叡山西塔陽勝仙人)『今昔物語集』(巻一三・陽勝修二苦行一成三仙人一語第三)『本朝神社考』(下之五・陽勝)『本朝列仙伝』(巻二・

陽勝）『本朝語園』（巻九・424陽勝仙人）などにも見え、『扶桑蒙求』（巻下・56陽勝叡果）は本書に依る。

70 留侯辟殺

始皇帝が東遊し博浪沙に至るや、張良は力士に鉄椎を操らせ彼を討たせようとした。劉季の拳兵に良は従い、遂に秦を滅ぼした。また、韓の公子成に仕えたが、項籍が成を殺したのでこれを滅ぼした。彼は穀物を食べなかつた。朱子が言う、張良は漢に依つて秦を滅ぼし、項籍を誅した後、人間の事を棄て、穀物を避け、姿形を銷して公紘九垓（この世）の外にあらんとし、千年後の人にいかなる人や、と想像嘆息させているのである、と。

出典は『統蒙求』（巻一・16張良辟殺）。猶、張良のことは『史記』（巻五五・留侯世家第二五）『漢書』（巻四〇・張陳王周伝第一〇）『十八史略』（巻二・秦）などに見える。

71 渡妻代臥

阿都磨（衣川袈裟）は源渡の妻で当代きつての美人。遠藤盛遠は一見して心奪われ、その母を脅し仲をとりもたせようとする。話を聞いた妻は自分が死ぬ外ないと考え、「夫を殺せば妻になる。夜沐浴して臥しているのが夫だから、髪を濡れているのを確かめ刺せ」と伝えた。盛遠は喜んで首をとったが、それは妻の首だった。彼はその後感ずる所あり僧となり名を文覚と改め、彼女の為に作った塚は「恋塚」と呼ばれ、今も鳥羽にある。

出典は『日本古今人物志』（巻六・16阿都磨）。盛遠の出家については『源平盛衰記』（巻一九・文覚発心附東帰節女の事）『贈餘雜録』（巻一）『本朝蒙求』（巻中・7盛遠斬婦）などにも見える。話の主人公を源渡の妻として記すものに『本朝女鑑』（巻五・10源渡妻）『本朝美人鑑』（巻三・5袈裟御前之事）もある他、「恋塚寺」「恋塚物語」といった能楽や浄瑠璃物、更に歌舞伎等の世界へと、所謂文覚物には広い浸透が伺われ、芥川龍之介「袈裟と盛遠」（大正七年（一九一八）『中央公論』）の出現もその系譜の中にあるだろうか。

72 京女新沐

節女は長安の都の人の妻だった。その夫に恨みを抱く人がおり、妻のことを耳にし、彼女の父を脅して仲をとり持たせようとした。妻は父と夫の間で悩み、己を捨てることとし、「沐浴し臥しているのが夫で、戸を開けておくから」と相手に伝

えさせ、自らが沐し楼上に臥す。相手は夜半に侵入し首を断ち持ち帰るが、明けて見ると妻の頭だった。『論語』に云う「君子は身を殺して仁を成す」とはこのことだ。

出典は『列女伝』（巻五・節義・京師節女）。但し、前項との対のヒントは『源平盛衰記』（前記）にあったらうか。

73 小左出水

景行天皇は筑紫を巡狩し、四月に芦北の小島に宿した。食事の時に小左に冷水を求めたが、島には水がなく、彼が天神地祇に祈ったところ忽かに寒泉が涌出した。

出典は『日本書紀』（巻七・景行天皇一八年三月、四月条）。『扶桑蒙求』（巻中・35小左出水）は本書に依る。

74 耿恭拜井

後漢の耿恭は永平末年に金浦城に駐屯するや匈奴の攻撃を受け、毒矢を射て応戦撃退し、疏勒城に陣を張った時も攻められたが、奮戦し蹴ちらした。敵は水を断つも、恭が井を穿ち衣服を整え井に拜禱すると水泉が奔出、敵は神明として退いた。その後も匈奴と戦い食料も尽き困窮するが、武器の筋革を煮て兵と生死を共にしたので皆一心なく、敵もその軍を下すことはできなかった。

出典は『蒙求』（512「耿恭拜井」）。耿恭の伝は『後漢書』（巻一九・耿弇列伝第九・国弟子恭）に見える。この故事は他に『芸文類聚』（巻九・泉）『太平御覧』（巻一八九・井）『事文類聚』（続集巻一〇・井）『古今合璧事類備要』（巻九・泉）『君臣故事』（句解巻三・将帥）『金壁故事』（巻五・拜泉祈泉大丈夫）『潜確居類書』（巻二一〇・泉）『湖鑑類函』（巻三一・泉二）等の類書にも見える。

75 入鹿檣岡

蘇我入鹿は甘檣岡に家を立てて谷の宮門、子は王子と呼ばせ、家の外には城柵をめぐらし、門あたりに兵庫を作り備えた。また、大丹穂山に寺を、畝傍山の東に池と城を造り、矢などの武器を貯え、常時五十人の兵にガードさせ、名付けて東方儂従者などと言った。

出典は『日本書紀』（巻二四・皇極天皇三年一月条）。他に『日本紀略』（前篇七・皇極天皇三年一月条）『扶桑略記』（第四・皇極天皇三年一月条）『帝王編年記』（第八・皇極天皇三年一月条）『水鏡』（巻中・皇極天皇）等にも見え、『扶桑蒙求』（巻上・70入鹿檣岡）は本書に依るか。

76 似道葛嶺

賈似道は西湖の葛嶺に邸を建て五日に一度登朝するだけだったので、役人が文書を抱え賈の邸に行き決裁を受ける始末で、すべての案件は彼の上奏が無ければ実行されなかった。かくて良い人材は退けられ殆ど姿を消し、一方で賄賂で出世を企てる者が増え、貪欲の風が社会に蔓った。軍が国外で敗れても賈は上聞せず、民が怨み苦しんでいても誰一人声を挙げなかった。

出典は『十八史略』(巻七・南宋・度宗皇帝)。猶、賈似道の伝は『宋史』(巻四七四・姦臣伝四)に見える。

77 信隆雞埒

藤原信隆は娘の殖子の入内を願う。人が白雞千羽を飼うとその家は必ず皇后を出すというので、実行したところ高倉帝の時に後宮に召された。

出典は『本朝蒙求』(巻下・109信隆養鶏)。そのもとは『平家物語』(巻八・四の宮即位)や『源平盛衰記』(巻三二・四の宮御位の事)であろう。猶、『扶桑蒙求』(巻下・58信隆鶏埒)は本書に依る。

78 竇毅雀屏

周の上柱国の竇毅の娘は数歳で『列女伝』を読み、忘れなかった。隋の高祖が周の禪讓を受けるや、彼女は自らを床下に投じ「男子でないのが恨めしい、この難を救えぬのが無念だ」と言うと、父は「妄りに口にしてはならぬ」と注意し、夫人には「娘には奇相がある。妄りに嫁がせるな」と言っていた。二羽の孔雀を描いた屏風を立て婚を請う者に射させ、その目を射たら嫁がせるつもりでいたが、李測が最後に射当てた。彼は唐高祖となり、娘は后となった。

出典は『新唐書』(巻七六・列伝第一・后妃上・太穆竇皇后)か。李測が孔雀の目を射て彼女を得たことは、『太平御覧』(巻九二四・孔雀)『事文類聚』(後集巻一三・婚姻)『円機活法』(巻八・婚姻)『古今合璧事類備要』(巻六四・孔雀)『瀕鑑類函』(巻五七・皇后総載三)等の類書にも見えており、本朝の『語園』(巻上・74 聳ヲ撰事)にも引かれる。

79 盛親芋魁

仁和寺の真乗院の盛親僧都は智徳兼備で密学の蘊奥を得ていた。肥満で力があり、物事にとられない性格で、飢えれば食い、疲れたら眠った。芋魁を好み、食べながら誦経講法を行った。病の時は閉戸籠居して好きなだけ芋魁を食べて治した。

先師が臨終時に彼に房と錢を授けたが、彼は房も売払って、全額芋魁の代金とした。出典は『徒然草』(六〇段)『野槌』などの古注を用いている。猶、盛親のことは『扶桑隱逸伝』(巻下・盛親)にも見えている。

80 凱(愷)之蔗境

顧凱(愷が正しい)之は画に巧みで三絶(才絶・画絶・癡絶)有りと称された。甘蔗を食べ、尾から本へ至る時に「漸く佳境に入った」と云った。

出典未詳。但し、三絶のことは『図繪宝鑑』(巻二・晋・顧愷之)に見え、甘蔗を食って佳境に入る話は『世説新語』(排調第二五・59話)『晋書』(巻九二・列伝第六二・文苑伝・顧愷之)や『芸文類聚』(巻八七・甘蔗)『太平御覧』(巻九七四・甘蔗)『能改齋漫録』(巻五)『事文類聚』(後集巻二七・蔗)『円機活法』(巻二一・甘蔗)『瀕鑑類函』(巻四〇四・甘蔗二)等の類書にも見える。

81 神功祝胎

神功皇后は聡明睿智で容貌麗しかった。筑紫檀日宮で天皇が早逝した時、神の教えに従わなかった為と考え、罪過を悔改めた。諸国に命じ船の軍事演習を行った時は、皇后の産み月に当たっていた。彼女は神に祈り、和珥の津を発ち、船の新羅に至るや新羅王は降服し、高麗・百済二国の王も朝貢を欠かさず行うこととなった。かくて内宮家を定めたが、これを三韓という。皇后は新羅から戻り、筑紫で萱田天皇を生んだ。

出典は『日本書紀』(巻九・神功皇后・撰政前紀)。他に『日本紀略』(前篇四・神功皇后)にも見え、『扶桑蒙求』(巻上・9神功祝胎)は本書に依る。

82 杜后生齒

晋の成恭杜皇后は幼少より姿色麗しかったが、成長しても歯無しで、求婚者がいても中断になった。が、成帝に嫁ぐ日に一夜で歯が生え揃った。六年間皇后に在ったが子は無かった。三呉地方の女子が白い花を簪にし、眺めると白い奈の花のようだった。人々は天の神の織女が亡くなったのだと云ったが、この時皇后も崩じた。出典は『蒙求』(37「杜后生齒」)。猶、『晋書』(巻三二・列伝第二・后妃下・成恭杜皇后)にも見える他、『白氏六帖』(巻九・口齒)『太平御覧』(巻一三八・皇親部四・成恭杜皇后)『事文類聚』(前集巻二〇・皇后)等の類書にも引かれている。

83 武雷駕鹿

春日の四大明神は武雷命・斎王命・天津児屋根命・姫大神である。武雷命は常陸の鹿島を出、棲む処を求め白鹿に乗り、神の枝を鞭とし伊勢の名張にやって来た。三笠山に至り三神に告げると、斎王命は下総香取から、天児屋根命は河内枚方から、姫大神は伊勢から来り、三笠山で宮柱を立てた。

出典は『本朝神社考』（上之一・春日）。猶、『扶桑蒙求』（巻上・5武雷駕鹿）は本書に依る。

84 琴高乗鯉

琴高は宋の康王の舎人となり涓彭の術を行い、冀州涿郡の間に浮遊すること二百余年、涿水で龍の子を取った。弟子達に某日に会おうと約し、彼らが水辺で待っていると、高は鯉に乗ってやって来た。観る者も万餘人あり、一月後水中に去った。

出典は『列仙伝』（巻上・琴高）か。他に『太平広記』（巻四・琴高）『事文類聚』（前集巻三四・仙。後集巻三四・魚）『古今合璧事類備要』（巻八六・魚）『潜確居類書』（巻六三・列仙）等の類書にも見え、本朝の『語園』（巻上・44琴高鯉ニノル事）にも引かれる。

85 重盛促命

平重盛は父清盛を助け内大臣に至り、父の驕りをしばしば諷諫した。上皇の寵臣成親の平氏討伐計画が発覚した時數十人を誅し流罪としたが、父が自ら上皇に対し挙兵しようとした時には、彼は涕泣し忠義至誠を以て父を諫めた。彼は自らの命をかけた父の熊野詣による修善を祈り、帰洛後病んで癒えなかった。父は宋の良医を招こうとするが、彼は論じて辞退させ、終に四十三歳で薨じた。

出典は『日本古今人物志』（巻一・一九平重盛伝）。『扶桑蒙求』（巻下・83重盛促命）は本書に依る。

86 土燮祈死

晋の范文子は鄢陵の戦から戻ると、巫者に自分の死を祈らせた。「主君が驕奢なのに敵に勝つとは天が国の病を益すということだ。そのうち国難が起こるだろう。御先祖様よ、我を早く死なせ、難に遇わせぬように。それが范氏の福だ」と言い土燮（范文子のこと）は死んだ。

出典は『春秋左氏伝』（巻二八・成公一七年）。但し、後半の付記部分は典拠未詳。

87 忠光報讐

後鳥羽帝が永福寺の新堂を営んだ時、源頼朝が検覧した。上総五郎兵衛忠光は魚鱗で左眼を蔽って片目を装い剣を懐に頼朝を狙ったが、頼朝に怪しまれ、景時に捕えられ尋問されて殺された。

出典は『本朝蒙求』（巻中・21忠光魚鱗）。もとは『吾妻鏡』（巻一二・建久三年正月二二日、二月二四日条）に依るか。このこと『絵本故事談』（巻五・上総忠光）や『扶桑蒙求』（巻中・6忠光報讐）に受けつがれる。共に『本朝蒙求』に依るか。

88 予讓知己

予讓は智伯に仕え寵遇された。趙襄子は韓・魏と共に智伯を滅ぼし、怨みからその頭を漆で塗り飲器とした。讓は「士は己を知る者の為に死し、女は己を説ぶ者の為に容る。必ずや智伯の仇を討つ」と言い、名姓を変え刑人となり襄子の宮殿に入り彼の刺殺を試みるも発覚。義を以て許されるも、次に体に漆を塗り癩病を装い、橋下で襄子を待伏するが、また捕えられる。襄子が理由を問うと「智伯が国士を以て遇してくれたので、我も国士を以て報いるのだ」と答えた。そこで襄子はまたも彼を許し、「自分の身のふり方は自分で考えよ」と言うや、彼は裏にその衣を求め剣を撃ちつけて、智伯に報いることができたと言い、剣に伏して死んだ。

出典は『蒙求』（337「予讓吞炭」）。予讓の伝は『史記』（巻八六・刺客列伝第二六）に見え、『芸文類聚』（巻三三・報讐。『戦国策』趙策所引）『事文類聚』（別集巻三一・報讐）『書言故事大全』（巻二・古今譬類）『湖鑑類函』（巻三二二・報讐二。『戦国策』所引）等の類書にも見える。

89 兄媛定省

応神帝が大隅宮の高台で遠望していると、妃の兄媛も近侍して西望し歎息したので問うと、「父母が恋しくて歎いています。できればしばしば帰郷し親に会いたいです」と答えた。帝は感じ入り帰省を許し、淡路の海人八十人を漕ぎ手とし、吉備に送らせた。

出典は『本朝蒙求』（巻下・125兄媛省親）。もとは『日本書紀』（巻一〇・応神天皇二年三月五日、一四日条）で、『日本紀略』（前篇四・応神天皇二年三月五日、一四日条）や『本朝列女伝』（巻一・吉備兄媛）『本朝孝子伝』（巻下・一兄媛）にも見える。

90 大妃帰寧

『詩経』周南「葛覃」の末章に「言に師氏に告ぐ、言に告げ言に帰る、薄く我が私を汚はん、薄く我が衣を澣はん、害ぞ澣ひ害ぞ否らん、父母に帰寧せんとなり」とある。澣甘泉（字は元明）によると、「葛覃」「卷耳」「樛木」「螽斯」の章は文王正家の中頃、后妃居家の時のことで、文王の妃は大妃であるという。

出典は『詩経』（周南「葛覃」）で、明の澣甘泉の注が付されているものである。

91 源順梨壺

村上帝は天曆五年に昭陽舎にて坂上望城・紀時文・源順・大中臣能宣・清原元輔に『万葉集』を巡講させ、『後撰集』を撰集させた。藤原伊尹が撰集の総裁をつとめ、帝自ら詔書を書いた。その文は源順の作で『本朝文粹』に見える。昭陽舎を梨壺と呼び、彼らは梨壺の五人と称される。

出典は『後撰和歌集』か。歴史民俗博物館本（天福二年書写本の透写本）の卷末勅物に「学生順」「御書所預坂上望城」とあるのは（『源順集』でも同様）和歌所寄人になった時の身分だが、本書では極官で記されている。猶、勅物にも引かれる「官旨奉行文」は『本朝文粹』（卷二・385）の他、『朝野群載』（卷二）にもとられている。『扶桑蒙求』（卷中・9 源順梨壺）は本書に依る。

92 逸少蘭亭

何延年「蘭亭記」に「晋の永和九年暮春、王右軍は親友四二人と蘭亭に脩禊し毫を揮って序を製した……（秘蔵されたその）書は七伝して智永に至り、蘭亭叙はその弟子の弁才に授けられ……寢室の梁上に蔵され、拝見されることはめつたになかった」とあり、真蹟の跋には一人が詩二首、一五人が一首、一六人は詩成らず罰酒三杯を飲んだとある。

出典は『法書要録』（卷三）。何延年「蘭亭記」は『太平広記』（卷二〇八・書三。「購」蘭亭序）（『法書要録』）にも見える。跋文は刻本によるか（『雲谷雜記』の内容とも照応する）。猶、後に沢田東江「書述」（卷下・晋王羲之蘭亭叙）は本書当該部分（「……所罕見」まで）を含む『法書要録』の文を引用している。

93 覚猷図画

鳥羽僧正覚猷は図画をよくした。真筆と称するものは「画馬」があるだけだが妙処をえた作であろう。

出典は『日本古今人物史』（卷七・7 鳥羽僧正伝）。その後、『遠碧軒記』（下之

三・僧侶）や『本朝画史』（卷上・鳥羽僧正覚猷）等にも見え、『扶桑蒙求』（卷下・11 覚猷図画）は本書に依る。猶、覚猷の画才は『古今著聞集』（卷一・画図第一六・12 鳥羽僧正絵を以て供米の不法を諷する事、13 鳥羽僧正持法師の絵を難じ法師の所説に承伏の事）でも知られる。

94 禅月丹青

僧貫休は詩名あり、王衍に待遇され紫衣を賜り禅月大師と号した。絵を善くし羅漢図は最も優れて古野の貌あり、世間のものとは異なっていた。

出典は『図絵宝鑑』（卷二・五代）。

95 親元減杖

安房守源親元は白河帝即位前は衛門府・檢非違使勤めで陰徳を施し、四十過ぎて仏事に務め、洛東の一字に阿弥陀像を安置し、光堂と言う。嘉保三年安房守となり俸禄で寺を建て、余暇に念仏を唱え、吏民にも修法を勧めた。法を犯す者にも刑を弛めて対し、仏に帰依する者が多かった。

出典は『本朝蒙求』（卷中・63 親元陰徳）。もとは『後拾遺往生伝』（卷上・21 前安房守源親元）『発心集』（卷七・86 源親元普く念仏を勧め往生の事）『元亨釈書』（卷一七・願雜二・王臣二）等に見えるもの。猶、本文中に「白河帝潜藩時」「本朝蒙求」も同文とあるのは「延久帝潜藩時」「元亨釈書」「後三條天皇在藩之初」（『後拾遺往生伝』）とあるのが正しい。『扶桑蒙求』（卷中・65 親元減杖）は『本朝蒙求』や本書の誤りをそのまま継承している。

96 劉寛弛刑

後漢の劉寛は南陽太守に遷り、三郡の太守を歴任し温仁で思いやりがあり、慌たらしい時でも早口になつたりあわてた顔をしなかつた。過失あれば蒲の鞭で罰し、その羞恥心に訴えるだけだった。靈帝の時三公となり、責任の重さにストレスで酔っているようだ帝に申し上げて嘉された。夫人が彼を怒らせようと召使いに命じ肉羹でわざと彼の衣を汚させた。彼は顔色も変えずゆつくりと「手はただれなかつたか？」と召使いを氣遣った。

出典は『蒙求』（500 「劉寛蒲鞭」）。劉寛の伝は『後漢書』（第二五・卓魯魏劉列伝第一五（劉寛））に見える。この故事は善政の逸話として有名で、『芸文類聚』（卷八二・蒲）『十七史蒙求』（卷一五・劉寛葦杖）『日記故事大全』（卷六・寛厚類・「翻」羹不異）善政類・「蒲鞭示辱」『事文類聚』（外集卷一〇・総管府）『潜確

居類書』（巻五五・太守）等の類書にも引かれる。

97 舍人書紀

「弘仁私記」序に依ると、『日本書紀』は舍人親王・太安麻呂が勅を奉じ、三十卷并帝王系図一卷を撰したるもの。養老四年五月に献じられ、天地混沌の時より神胤皇裔に至る世界が明白にされ、異端の説も備わり該博なものとなっている。

出典は『釈日本紀』（巻一・開題）。『扶桑蒙求』（巻上・22舍人書紀）は本書の抄出。

98 馬遷史記

『文献通考』に、『史記』一三〇巻は漢の大司馬馬遷が父の談の書に続けて、黃帝より漢武帝迄を記し、十二本紀・十年表・八書・三十世家・七十列伝で、三千餘年、凡そ五二万六五〇〇言から成る。遷の没後、礼楽・律書・二王世家等を欠くも、褚少孫が追補。

出典は『文献通考』（巻一九一・經籍考一八・「史記一百三十巻」）。

99 為朝豺目

源為朝は長七尺で、豺おおかみのように鋭い目、猿のように長い臂、力は甚だ優れ強弓を引き、十三歳で鎮西八郎と呼ばれた。連戦連勝し、保元の乱では父と共に崇徳上皇を護つたが伊豆に流され、嘉応年中に攻められ自殺した。

出典は『日本古今人物史』（巻一・16源為朝伝）。『本朝語園』（巻六・301為朝強勇）も恐らく上記に依り、『扶桑蒙求』（巻中・101為朝豺目）は本書からの抄出であろう。

100 李広猿臂

李広は長身で臂が長く弓射に優れ、子孫は誰も彼に及ばなかった。訥弁で口数少なく、地に軍陣を画くことや弓射に生涯を終えた。兵糧に欠く時は兵士達が飲食しないうちは水も食物も口にしなかった。穏やかな人で兵は喜んで彼に仕えた。中らぬと思えば矢を放たず、発すれば必ず射倒した。

出典は『史記』（巻一〇九・李將軍列伝第四九）。他に『漢書』（巻五四・李広蘇建伝第二四）にも見え、類書等にもその名将ぶりはよく引かれ、「李広成蹊」（『蒙求』168）の故事は殊に有名。

101 二条再后

二条帝は猜忌心が強く女色に耽った。近衛帝の後藤原多子の美艶を聞き、招いて再び后にしようとした。藤原氏や群臣も反対したが強行し後宮に入れた。唐高宗の覆轍を踏む（則天武后を指す）かと思われたが、そうならなかったのは幸いであった。

出典は『平家物語』（巻一・二代后）か、『源平盛衰記』（巻二・二代后附則天皇后の事）か。猶、『本朝美人鑑』（巻三・3二代后）『本朝語園』（巻八・381二代文后）でも採挙げられ、明治の『日本蒙求初編』（巻上・二代皇后）にも見える。

102 魏文旧侍

魏武帝の没後、子の文帝はその宮女達を自分のものにした。文帝の病臥重くなり、母の卞后が見舞うと、何と宿直の宮女は武帝の寵愛していた者達ばかりだったので嘆息し、「死んで当然だ」と言い、哭泣の礼もしなかった。

出典は『世説新語』（賢媛第一九・4話）。

103 杉本詐泣

杉本左兵衛某は涙して泣くのが特技だった。楠正成下の松原五郎が彼を推薦し、正成は必ずや彼を用いることがあると言ったが、仲間は一矢に付した。建武二年尊氏軍との洛中合戦後、官軍は近江坂本の本営に戻った。正成は奇計を案じ、杉本に主人の正成が戦死したので僧となり、戦場に遺骸を求めたく助勢を願いたいと泣いて訴えさせた。捜すも見えず悲哭して帰る時、足利軍の訊問に遭い、正成他新田義貞・北畠顕家の戦死を告げる。尊氏軍は聞いて歓喜し、警戒を怠ったところに、正成らの官軍が攻め込んで足利軍を敗走せしめた。

出典未詳。『太平記』（巻一五・將軍都落附薬師丸帰京事）には右の逸話に類する記述はあるが杉本左兵衛のことは記さない。

104 羊志急涙

宋の殷貴妃が亡くなった時、帝が墓に至り、劉徳顔に「大声で貴妃の死を悲しんだら手厚い褒美をするぞ」と言うと、劉は慟哭し予州刺史に任じられた。医師の羊志にも哭泣させると、急に嗚咽したので、人が問うと、「亡き妻を哭したのだ」と言った。

出典は『潜確居類書』（巻七二・悼亡。「悲当厚賞」）か。猶、徳願の伝は『宋書』（巻四五・列伝第五・劉懷慎伝付載）に見える。

105 造媛諱塩

大化五年の春、蘇我日向は詐り訴えた、皇太子の海浜に遊ばれる時に倉山田麻呂大臣が殺害を企てていると。皇太子は信じ、物部塩を呼び大臣の首を斬らせた。その妃の蘇我造媛は父が塩に殺されたと知ってその名を憎み、近侍の者は堅塩と言ったが、遂に媛は傷心して死んだ。

出典は『日本書紀』(巻二五・孝徳天皇大化五年三月条)、『日本紀略』(前篇七・孝徳天皇五年三月二四日、二六日、是月条)にも見える。或いは上記より抄出した『本朝列女伝』(巻二・夫人・蘇我造媛)あたりも披見していたかも知れない。『扶桑蒙求』(巻中・60造媛諱塩)は本書に依る。

106 師徳俛餠

袁師徳は高の子。重陽に餠(くさもち・むしもち)を出されたが、(餠が父の名の高と同音なので)「食するに忍びない」と俯いた。

出典は『田機活法』(巻三・重九)か。猶、この故事は『歳時広記』(巻三四・重陽上・「請客糕」)『錦繡万花谷』(後集巻四・重九)『嘉話録』(所引)『古今合璧事類備要』(前集巻一七・重九)『嘉話録』(所引)『瀕鑑類函』(巻二〇・九月九日四)『嘉話録』(所引)等にも見える。

107 鎌子錦冠

中臣鎌子(藤原鎌足)は孝徳帝の時に内臣となり忠誠心をもって仕え、天智帝八年に病んだ時、帝は心配して東宮(大海人皇子)を遣し、大織冠と大臣位を授け藤原姓を賜った。

出典は『本朝蒙求』(巻中・66鎌子錦冠)、『日本書紀』(巻二五・孝徳天皇即位前紀。巻二七・天智天皇八年一〇月一〇日条)『日本紀略』(前篇七・孝徳天皇。前篇八・天智天皇八年)にも見える。『扶桑蒙求』(巻上・67鎌子錦冠)は本書に依るか。

108 梁公金袍

則天武后の時、狄仁傑は最も信重され国老と称された。紫袍龜帯を賜り、自ら金字十二袍を作り、その忠義を示した。

出典未詳。但し、『十八史略』(巻五・唐・中宗皇帝)と『事文類聚』(巻一九・朝服)あたりの記事の合綴かも知れない。他に『古今合璧事類備要』(後集巻三五・袍)『瀕鑑類函』(巻三七・袍)『雞跖集』(所引)にも見える。猶、狄仁傑の伝は『旧唐書』(巻八八・列伝第三九・狄仁傑)『新唐書』(巻一一五・列伝第四

〇・狄仁傑)に見える。

109 伊陟(陟)兔裘

兼明親王の源伊陟(陟が正しい)は父亡き後、一条帝に遺文はないかと問われ、悉く散佚したが、ただ「兔の裘」なるものがあると答えた。帝が献じられた一軸を侍臣に読ませると兼明自作の「兔裘賦」で、帝は人知れず所蔵された。伊陟は才学無く兔と兎の違いも知らなかった。

出典は『本朝語園』(巻四・190伊陟奉兔裘賦)か。伊陟が出てくるこの逸話は『十訓抄』(第一〇・可レ庶幾才能去業一事・1伊陟卿のうさぎの裘)『古事談』(第六・34伊陟不覚の事)『花鳥餘情』(巻一〇・松風・「みぶの大夫の君に申給はりて」注)『史館茗話』(70話)に見え、『大東世語』(巻五・糺漏・1話)『瓊矛餘滴』(巻中・兼明文章)等にも受継られる。『扶桑蒙求』(巻中・伊陟兔裘)は本書に依る。

110 道隆鳳毛

宋武帝が謝超宗を「鳳毛有り」と称した。同座していた劉道隆が彼に「変わった物をお持ちと聞いたが一見したい」と言うと、「貧乏屋に変わったものなどありません」と答えた。「帝が宴会で君には鳳毛があると云ってたぞ」と謝の父の名に触れ(超宗の父は鳳)言うと、謝は履き物も履かずに家に戻った。劉は鳳毛を捜しているとはかり思ったが、夜出かけて行っても得られなかった。

出典は『南史』(巻一九・列伝第一七・謝超宗伝)か。他に『南齊書』(巻三六・列伝第一七・謝超宗)『冊府元龜』(巻九五四・愚暗)などにも見える。

111 曾我張弓

曾我祐成・時宗(時致が一般か)は父祐泰の没後、曾我祐信に育てられ、幼時から弓矢で遊び、父の仇を討つことを忘れなかった。建久四年(一一九三)源頼朝が富士の野で狩りをした時、その陣営に潜入し、頼朝の寵臣工藤祐経を刺殺し、その後も死闘を行う。兄は仁田忠常に斬られ、捕えられた弟は頼朝に胸中を吐き死にいついた。

出典は『日本古今人物史』(巻四・5曾我祐成同時宗伝)。もともとは『曾我物語』や『吾妻鏡』(建久四年五月二八、二九日条)あたりを経て、さらに『本朝蒙求』(巻中・47祐成報讐)『本朝孝子伝』(巻中・曾我兄弟)『絵本故事談』(巻五・曾我兄弟)などにも記されるが、絵解きや幸若舞曲・謡曲等で早くから知られ、浄

瑠璃・歌舞伎の舞台化で広く浸透する逸話である。猶、『扶桑蒙求』（巻中・37首我張弓）は本書に依る。

112 君操挟刀

隋末に父を同郷人の李君則に殺された王君操は幼くして亡命した。貞観の年に世が変わり（君則は州府に自首したが）、君操は饑れ孤独の身で仇の名を隠さず、密かに刀を手挟み、殺して心肝を割き噉らい尽くさんと州に訴え、「父を殺されて二十年敵討ちも遂げられぬ。今憤懣を晴らし死にたい」と状を上った。

出典は『新唐書』（巻一九五・列伝第一二〇・王君操）か。猶、『旧唐書』（巻一八八・列伝第一三八・王君操）にも見える。『湖鑑類函』（巻三二二・報讐三）にも採られているので、それに先立つ類書による可能性もある。

113 言主架橋

役小角（役行者）は五色の雲に乗り仙府に優遊し鬼神を駆使した。葛城の峯と金峯山の間に石橋を架けよと衆神に命じたが、なかなか出来ないで理由を問うと、醜い葛城峯の一言主神が昼働かず夜にやってくるせいだという。小角は怒って彼を捕え深い谷底に繋ぐが、一言主は小角を国を傾ける危殆の人と讒訴した。

出典は『本朝神社考』（中之四・葛城神）か。上記は恐らく『元亨釈書』（巻一五・方応八・役小角）に依り、『本朝蒙求』（巻中・105小角騰空）も『釈書』を利用して。猶、一言主神の架橋説話は『日本靈異記』（巻上・孔雀王の呪法を修持し異しき験力を得もちて現に仙となりて天に飛ぶ縁第二八）『本朝神仙伝』（五・役行者）『今昔物語集』（巻一一・役優婆塞誦持呪・驅鬼神一語第三）『扶桑略記』（巻五・文武天皇三年五月二四日条）『水鏡』（巻中・文武天皇）『三宝絵』（巻中・役行者）『帝王編年記』（巻一〇・文武天皇三年五月、大宝元年条）『奥義抄』（巻三・いははしの歌第一七）『袖中抄』（第六・いははしの条）『俊秘抄』（上）『真言伝』（巻四・役優婆塞付葛城事）『類聚既驗抄』（葛城一言主明神石橋事）『和歌色葉』（巻下・15石橋の夜の契りも絶へぬべしあくるわびしき葛城の神）『源平盛衰記』（巻二八・役の行者の事）『本朝列仙伝』（巻一・役小角）等広く受継がれる。

『扶桑蒙求』（巻上・12言主駕（架）橋）は本書に依る。

114 嫦娥奔月

唐詩に「嫦娥応レ悔偷三靈薬」の句があり、謝枋得（一二二六〜八九）の注に「有窮の後羿が長生不死の薬を得るや、妻は窃み月中に奔った。これを嫦娥とする

説は怪しいが、『楚辞』天問章に見える」とある。

出典未詳。文中の七言一句は李商隱「嫦娥詩」七絶の第三句。猶詩句は『紫薇詩話』『唐詩品匯』『唐詩別裁』『唐詩箋注』『唐人万首絶句選評』など諸書に引かれる。標題からするとわざわざ李商隱の詩句を引用する必然性はなかったかも知れない。

「嫦娥奔月」（本書標題の奔は奔に同じ）の故事はよく知られて、『芸文類聚』（巻一・月）『太平御覽』（巻四・月）『事文類聚』（前集卷二・月）『古今合璧事類備要』（前集卷一）『群書類編故事』（巻一）『湖鑑類函』（巻三・月二）等の諸類書にも見えるものである。

115 鎌足奉履

中臣鎌足は匡濟の心有り、神祇伯を授けらるるも病と称し三島に退去した。蘇我入鹿が国権を闕うのを見て中大兄皇子に心を寄せ、法興寺の槻の木の下で蹴鞠の会で、その脱げた皮履を奉じ、皇子と隔てなき交友を持ち、共に南淵先生に学んだ。

出典は『本朝蒙求』（巻上・28鎌足奉履）。他に『日本書紀』（巻二四・皇極天皇三年正月一日条）『日本紀略』（前篇七・皇極天皇）にも見え、『本朝儒宗伝』（巻二・中臣鎌足）にも引用される。『扶桑蒙求』（巻中・11鎌足奉履）も本書に依るか。

116 釈之結褵

廷尉の張釈之は公平な裁決を行い称せられた。宮中に召されていた老人王生が「靴下の紐が解けた。結んでくれんか」と言うので釈之は膝まづいて結んでやった。それを見て王生を責める者がいた。すると、王生は「廷尉は立派な名臣だ。自分は老賤の身で彼に何もしてやれぬが、紐を結ばせることで老人に敬意を払う態度を示してもらい、天下に彼の名の重んじられんことを願ったのだ」と答えた。

出典は『蒙求』（巻下・116「釈之結褵」）。褵は褵に同じく靴下の意。張釈之の伝は『漢書』（巻五〇・張馮汲鄭伝第二〇）『史記』（巻一〇二・張釈之馮唐列伝第四二）に見え、この故事も記されるが、他に『事文類聚』（続集卷二〇・履（褵））『書言故事大全』（巻八・仕進類）『十七史蒙求』（巻一一・結褵取重）『潜確居類書』（巻五八・大理）『湖鑑類函』（巻三七五・褵二）等の類書にも見える。

117 文屋旧琴

嵯峨帝に寵遇された文屋麻呂は琴の師である。その後は仁明帝に仕え、光孝帝や本康王に伝授し、文徳・清和両帝も彼に琴を学んだ。

出典は『本朝語園』（巻七・356琴師）か。もとは『三代実録』（巻八・貞観六年二

月二日条の文室麻呂卒伝)に見え、『扶桑蒙求』(巻中・14文屋旧琴)は本書に依る。

118 魏徴故笏

魏徴は徴の五代の子孫。唐文帝が『貞観政要』を読んで(登場する)魏徴の子孫のことを訊ねたので、楊汝士は魏徴を推薦した。帝が「伝来の書はあるか」と問うと、魏徴は「故い笏があります」と答えたので上呈させた。

出典は『新唐書』(巻九七・列伝第二二・魏徴付魏徴)か。魏徴の伝は他に『旧唐書』(巻一七六・列伝第二二六)にも見え、この故事は『円機活法』(巻一六・笏)『古今合璧事類備要』(外集巻三八・笏。続集巻一一・魏姓)『統蒙求』(巻三・唐文訪笏)『淵鑑類函』(巻三七二・笏二)等類書にも採られている。

119 兼盛合血

平兼盛の妻はわけあって離縁された。娘を生んで数年になると聞き、彼が引き取るうとする、女は娘を愛惜して子であることを否定し裁判となった。廷尉の赤染時用が判決を下したが、時用と女が密通したものであろう。兼盛は怒って「私の子でないと言うなら、両者の血を合わせて確かめよう」と言ったが果たさなかった。それが赤染衛門で他にない美貌で、上東門院に仕え『栄花物語』を著した。

出典は『本朝語園』(巻四・214兼盛与二時用一論二赤染衛門二)か。もとは『袋草紙』(巻上・雑談101)に見え、『中古歌仙三十六人伝』にも受継がれ、『扶桑蒙求』(巻下・45兼盛合血)は本書に依る。

120 蕭綜認骨

梁武帝は齊の東昏に寵愛された呉淑媛を愛した。だから蕭綜が生まれた時宮人達は疑念を持った。彼が十四、五歳の頃、幾度も少年が自ら首をかかげる夢をみ、その特徴を母に語ると、東昏に似ており、彼は真実を知って泣く。齊氏の七廟の祠らに出向いた時、生者の血を死者の骨に灑ぎ、滲みれば父子だという俗説に従って試すと兆候があった。

出典未詳。但し、この逸話は『梁書』(巻五五・列伝第四九・予章王綜)にも見える。

121 髪長桑津

応神帝はすぐれた容色の髪長媛が気に入り、使いを遣って召し寄せ桑津宮に侍らしめた。すると大鶴鶴尊が彼女の美麗さに恋をしたので、帝は後宮の宴の折に彼に

妻合わせることとし、歌をうたい、尊も喜んで返歌した。

出典は『日本書紀』(巻一〇・応神天皇十一年一〇月、一三年三月、九月条)。「**積日本紀**」(巻二四・和歌二・応神)『**日本紀略**』(前篇四・応神天皇十一年一〇月、一三年三月、九月条)にも見え、『**扶桑蒙求**』(巻中・72髪長桑津)は本書に依る。

122 阿喬金屋

漢武帝が幼い太子の頃、長公主は娘を配すべく「阿喬はどう？」と問うと、「阿喬が妻になったら金屋に住ませたい」と彼が答えたので、大いに喜び配して陳后とした。

出典未詳。但し、この逸話は『漢武故事』に見え、『**芸文類聚**』(巻一六・太子妃)『**初学記**』(巻一〇・皇后)『**太平御覽**』(巻八八・孝武皇帝)『**事文類聚**』(前集巻二〇・皇后)『**古今合璧事類備要**』(前集巻二一・宮嬪)『**書言故事大全**』(巻一・婚姻類)『**淵鑑類函**』(巻五七・皇后総載三)などにも引かれている。また、「漢帝重三阿喬一、貯三之黄金屋二」(李白「妾薄命」)の句もよく知られる。

123 峰雄墨桜

藤原基経は堀河相国と称され、寛平三年に薨じて深草山に葬られ、昭宣公と諡された。その時挽歌が多く詠まれたが、上野峰雄の歌「深草の野辺の桜の心あらば今年ばかりは墨染に咲け」が殊に勝れ、世間ではその木を墨染の桜と言った。

出典は『**大鏡**』(巻上・太政大臣基経)。かの和歌は『**古今集**』(巻一六・哀傷歌832・上野岑雄)にも引かれ、『**書言字考節用集**』(巻六・生植。「墨染桜(城州深草)」)にも見えている。

124 娥皇斑竹

舜は南巡して帰らず、堯の二女娥皇・女英が追慕して洞庭の山で涙したところ、竹が斑に染まり、二妃は死して湘水の神となった。

出典は『**事文類聚**』(後集巻二四・竹)。猶、この故事はよく知られ、『**円機活法**』(巻二二・竹、斑竹)『**古今合璧事類備要**』(別集巻五四・竹)『**金壁故事**』(巻一・湘竹斑成悲涙染)『**淵鑑類函**』(巻四一七・竹二)等多くの類書に張華『**博物志**』所引で見え、本朝でも『**語園**』(巻上・85涙竹ヲ染ル事(事文))に引かれる。

125 行平布滝

在原行平は弟業平の撰津の兔原郡の別荘を訪ね、近くの布引滝に共に来て、「我

が世をば今日か明日かと待つかひの……」と詠み、弟も「ぬき乱る人こそあるらし白玉の……」と詠んだ。

出典は『伊勢物語』（八七段）。『扶桑蒙求』（巻中・17行平布滝）は本書に依る。

126 李白廬瀑

李白は廬山瀑布詩に「日照香炉生紫煙、遙看瀑布掛長川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天」と詠んだ。その瀑布は南康府廬山開先寺に在る。

出典は特に必要ないか。所引の「望廬山瀑布（水）二首」の其二は極めて著名な作（後半二句の摘句も諸書に見える）で、『文苑英華』（卷一六四）『唐文粹』（卷一六上）『韻語陽秋』（卷二三）『梅磻詩話』（『唐詩品彙』（卷四七）『唐宋詩醇』（卷七）『事文類聚』（前集卷一八・泉）『円機活法』（卷四・瀑布泉）『中華若木詩抄』（巻下）等にも採られ、日本の中世以降には李白看（観）瀑図も盛んに賞されている。猶、本書末尾の注記に従えば、廬瀑は南香鑪峯の西瀑（開先瀑布）となるが、一般的には北香鑪峯の方とする見解が多いようだ。『廬山名勝図』は西瀑を描いたもので、他に西瀑を指すとするものには『廬山記』（卷三・叙三山南一篇）『東坡志林』（卷一・記遊廬山）『輿地紀勝』（卷二五・南康郡）『方輿勝覽』（卷一七・南康郡）などが知られる。松浦友久編『唐詩解釈辞典』（大修館書店・一九八七年）『漢詩の事典』（同上・一九九九年）参照。

127 能因勢松

能因・兼房は同車し二条東洞院にやって来ると、因は俄かに下車して歩むこと数百歩。兼房が理由を問うと、ここが伊勢御の旧宅で庭の小道の結び松は今もある、と。

出典は『本朝語園』（卷三・100能因下車）か。もともとは『袋草紙』（巻上・雑談65）『俊頼髓脳』等に見え、『百人一首一夕話』（卷六・能因法師）『見聞談叢』（卷一・17能因法師）にも受継がれている。『扶桑蒙求』（巻下・55能因望松）は本書に依る。

128 道潜陶菊

呉の僧道潜は姑蘇より西湖に帰った。蘇東坡は役人として銭塘に来て彼に会い、一見して古馴染みのようだったと言った。超章泉が言う「瀕明には会えないが菊が見ればそれでいい」の句は、蘇東坡の言葉とも。

出典未詳。道潜は参寥子と号して詩文を善くし（『参寥子集』あり）、東坡とも交

遊深く詩文の贈答を行っている。

129 元正放魚

元正帝の養老四年に異国が襲来し日向・大隅の国が乱れた時、宇佐神宮に祈り、平定の後、放生会が諸国に置かれ、石清水放生会もこれに始まる。

出典は『本朝神社考』（上之一・八幡）。他に関連記事は『三宝絵』（巻下・八月・八幡放生会）『扶桑略記』（第六・元正天皇四年九月）『水鏡』（巻中・元正天皇）『元亨釈書』（卷三二・資治表・元正）等にも見え、放生会起源譚は年中行事関係書にも記される。『扶桑蒙求』（巻上・18元正放魚）は本書に依る。

130 成湯祝網

殷の成湯がある日外出すると、狐師が網を張り「天より降り、地よりわき、四方より来るもの、みなこの網にかかれ」と祈っていた。これでは取り尽くしてしまうと案じた湯は、改めて「左右に行きたいものは左右に、わが命に従わぬものは網にかかれ」と祈った。諸侯は湯の徳が鳥に迄及んでいると思った。

出典は『十八史略』（卷一・殷・殷王成湯）。猶、『史記』（卷三・殷本紀第三）にも見える。

131 義兼伴狂

源為朝の遺児は足利義清の子となり義兼と命名された。武勇絶勝の人で頼朝に面会を請うが、彼が人の才を妬む人だと深慮し、伴狂（狂人のふりをする）して安らかな生涯を送った。

出典は『本朝語園』（卷六・302義兼深慮）か。猶、『難太平記』にも関連記事があり、『扶桑蒙求』（巻上・64義兼伴狂）は本書に依る。

132 阮籍放蕩

阮籍は心のままに拘われず、閉戸読書して数月も外出しないかと思えば、山水に登臨し帰宅を忘れることもあった。老荘を好み、嘯き、琴酒を嗜み、廚に酒三百斛あると聞くと歩兵校尉の職を求めたという。

出典未詳。阮籍については『晋書』（卷四九・列伝第一九・阮籍）に詳しく、本書本文はその文とよく似る。猶、「放蕩」の語はその本文中には見えないが、『三国志』（卷二一・魏書二一・王衛二劉傳第二一・王粲伝付載）に「瑀子籍、才藻艶逸而個儻放蕩」とあるのを意識したものか。彼が歩兵校尉を求めた故事は余りに有

名で、『世説新語』(任誕篇・5話)『文士伝』『魏氏春秋』『初学記』(巻二六・酒)『蒙求』(590「阮籍青眼」)『事文類聚』(巻二三・酒)『測鑑類函』(巻三九二・酒二)など諸書に見える。後半の『論略』(宋・陳郁撰)引用と併せ典拠詮索未了。

133 頼家射鹿

源頼朝が富士の野で狩した時、八歳の息頼家が鹿を射たので喜び、梶原景高を遣わし夫人に知らせると「特に異とするに足らない、賀するに及ばず」と言ったという。

出典は『本朝語園』(巻六・316頼家始射鹿)、『吾妻鏡』(巻一三・建久四年五月一六日、二二日)に詳しい。『扶桑蒙求』(巻上・45頼家射鹿)は本書に依る。

134 蒼(倉)舒称象

魏の曹沖(曹操の子。字倉舒)は幼時より賢かった。太祖は孫権が贈った巨大な象の重量を知りたく思ったが、誰も測る術を知らなかった。沖は象を船に乗せて水痕を刻んでおき、替えて物を称つてこれに載せればわかると言った。当時国内の刑罰は嚴重だったが、沖の審理で救われた者も多く、太祖は彼を後継に期待したが亡くなってしまった。

出典は『蒙求』(414「倉舒称象」)。曹沖の伝は『三国志』(巻二〇・魏書二〇・鄧哀王沖)に見える。この故事はよく知られて『白氏六帖』(巻二九・象)『太平御覧』(巻七六八・叙舟上。巻八九〇・象)『事文類聚』(前集巻四四・幼悟)『古今合璧事類備要』(別集巻七六・象。外集巻五八・舟)等にも見え、本朝の『語園』(巻上・3舟ニテ象ヲ計ル事)にも採られる。猶、『雑宝蔵経』(巻一・4四棄老国縁)『今昔物語集』(巻五・七十餘人流二遣他国一語第三二)にも象の重さを量ることが見える。

135 通円遺影

宇治橋畔に通円法師なる者が茶店を構え、そこは今に通円像を伝えて通円茶店と称している。

出典は『本朝語園』(巻一〇・542茶并宇治通円の店)か。早く『雍州府志』(巻九・古跡門下・宇治郡)にも見え、通円のことば猿楽・狂言でも知られる。『扶桑蒙求』(巻下・91通円遺影)は本書に依る。

136 陸羽陶像

陸羽の宮は鴻漸。茶を嗜み『茶経』三篇を著す。茶を商う者は彼の陶像を作り茶神となすに至った。

出典未詳。陸羽の伝は『新唐書』(巻一九六・隱逸列伝)に見える。『測鑑類函』(巻三九〇・茶三。『唐書』所引)にも援引されているので、その先行類書に依るか。

137 晴明占瓜

藤原道長に大和国から瓜が届けられた時、傍に安倍晴明と大医の重雅がいた。「瓜があるが食べてみるか」と道長が言うと、晴明は「毒があるので食えない」と言う。重雅が一本の鍼を出し瓜に刺すと、その動きが止まり、割いて見ると中に毒蛇がいて、鍼はその眼を刺していた。

出典は『本朝蒙求』(巻上・34重雅針瓜)、『古今著聞集』(巻七・術道第九・1陰陽師晴明早瓜に毒気あるを占ふ事)『撰集抄』(巻八・第三三・折二空也上人手一事)『元亨釈書』(巻四・慧解三・園城寺勸修)『本朝神社考』(下之六・安倍晴明)『本朝語園』(巻七・340三子之精術)などの記述もある。『扶桑蒙求』(巻上・44晴明占瓜)は本書に依る。

138 郭璞移柏

王導は郭璞に一封を作らせた。郭が「公に震厄が出ている」と言うと、王は「調伏できぬか」と問う。そこで彼は「駕を命じ西方数里に行くと一本の柏樹がある。それを身長と同じ長さで切り、床上に置いて寝起きすればいい」と言う。その通りにすると柏が震動し粉砕した。王敦は「罪を樹に委ねたわけだね」と言った。

出典は『世説新語』(術解篇・8話)。他に『晋書』(巻七二・列伝第四二・郭璞)や『芸文類聚』(巻八八・柏。『晋書』所引)『太平御覧』(巻九五四・栢。『幽明録』所引)『測鑑類函』(巻四三・栢二。『晋書』所引)などの類書にも見える。

139 隆頼上座

勸学院の宴会の時、(惟宗)隆頼が上座に就いた。傍の者が「礼儀知らずにも、お前がわしの上座とはどういうことだ」と言うと、彼は「『文選』と『切韻』を暗誦する者がおつたら下座に就くが……」と言うと、皆敢えて言う者はなかった。

出典は『本朝語園』(巻四・二〇三隆頼学頭)。そのもとは『古今著聞集』(巻四・文学第五・16勸学院の学生集まりて酒宴の時惟宗隆頼自ら首座に着く事)で、林読耕斎もこの逸話を知っていた(『報二武田杏仙』)『読耕林先生文集』(巻三)の

は流石と言ふべきか。

140 戴憑重席

後漢の戴憑は光武帝の時に明経科に挙げられ博士の試験を受けた。侍中に任命され、正月の朝賀の時、帝は群臣中の經典に通じた者を選んで難詰し、答えられない者の席を奪って、通ずる者に与えた。戴憑は五十餘席も重ね「経を解して行き詰まらぬのは戴侍中だ」と言われた。

出典は『蒙求』（46「戴憑重席」）。『後漢書』（巻七九・列伝第六九・戴憑）にも見えるが、『芸文類聚』（巻六九・薦席）『初学記』（巻二五・席）『白氏六帖』（巻四・席）『事文類聚』（統集巻一一・席）『群書類編故事』（巻二〇・「説経奪席」）『円機活法』（巻一五・席）『古今合璧事類備要』（巻五・席・「奪席重坐」）『測鑑類函』（巻三七七・席三）等の類書にも所収。

141 良相施財

藤原良相は冬嗣の子で、良房の弟。幼時より賢く大学に学んだ。四十歳で妻を失い再婚もしなかった。慈仁の人で勸学院の南に延命院を建てて藤原氏の家産無き者を養育し、崇親院を置いて寡婦や貧しい婦女を助けた。

出典は『本朝蒙求』（巻中・102良相慈仁。巻中・25范藤自合）。良相の伝記に『三代実録』（巻一四・貞観九年一〇月一〇日薨去）『拾遺往生伝』（巻中）『元亨釈書』（巻一七・願維二・王臣・藤原良相）などがあり、この逸話に触れる。『扶桑蒙求』（巻下・7良相施財）は本書に依る。

142 純仁附麦

范純仁は若い頃昼夜仕事をした。帳中に迄灯火を入れ夜分迄寝ずに励んで出世した。妻が帳をかたづけると上の方が黒かったので、子供らに「若い頃の父さんが学問に勤めた灯煙のあとよ」と教えた。彼は若い頃父の命で姑蘇に到り、麦五百斛を舟で運ぶ途次、丹陽の宿で石曼卿と出会った。彼が三度の喪葬もできぬと知り、麦舟を与えて単騎で帰った。父が「途中で旧友に会わなかったか」と言うので、「石曼卿が十分な喪葬もできずにいた」と答えると、父は「どうして麦舟をあげなかったのか」と言うので、彼は「もう彼にやっつたよ」と応えた。

出典は『純正蒙求』（巻上・10純仁帳墨、115純仁与麦）か。猶、後半の麦舟逸話は『冷齋夜話』（巻一〇・范文正公麦舟）『群書類編故事』（巻一一・「贈以二麦舟」）『統蒙求』（巻三・忠宣付麦）『日記故事大全』（巻五・仁恩類・麦舟助喪）

『潜確居類書』（巻七二・賻贈）『測鑑類函』（巻三九五・麦四）など諸書に見える。

143 瀬尾悪党

元徳年間に中原章房が清水寺参詣の帰途に暗殺され、犯人は稲妻の如くに馳せ去った。子の章信は仇敵を探索して東山雲居寺の傍の居を襲撃して仇を討ち、世に孝義を称された。犯人は瀬尾兵衛太郎で、章房に怨みを抱く者の依頼によるものであった。

出典未詳。猶、『続本朝通鑑』（巻一一九・後醍醐天皇・元徳二年四月一日条）に詳述される記事内容にはほぼ同じ。その注記には「薩州本太平記」により記述したと見える。『扶桑蒙求』（巻中・88瀬尾悪党）は本書に依る。

144 聶政刺客

漢の大臣俠累は轂仲子と不仲だった。轂は聶政の武勇を聞き黄金百鎰を贈り、彼の母の長寿を祝い、その母没後に俠殺しを依頼した。政は俠を刺殺して、自らの顔を剥ぎ、目を抉り自殺したので、何人か知られることは無かったが、政の姉が氣付く。己に累が及ぶことを恐れた賢弟の所為に感じ、彼の屍の傍で彼女も自殺した。

出典は『十八史略』（巻一・春秋戦国・韓）。この文章は『史記』（巻八六・刺客列伝第二六・聶政）に詳説され、『続列女伝』（聶政之姉（節義））にも所収される。

145 誉津問鵠

誉津別皇子は三十歳になっても話さなかったが、鵠鳥が飛鳴するのを見て「これは何？」と言った時から話すようになった。

出典は『本朝蒙求』（巻中・27誉津問鵠）。もとは『日本書紀』（巻六・垂仁天皇二年二月九日、二三年九月二日、一〇月八日条）で、『日本紀略』（前篇四・垂仁天皇二年二月九日、二三年九月二日、一〇月八日条）や『帝王編年記』（巻四・垂仁天皇二三年条）等にも見え、『扶桑蒙求』（巻上・27誉津問鵠）は本書に依るか。

146 楚荘有鳥

荘王は即位後三年間号令を出さず日夜淫楽し、「諫める者は死刑だ」と訓令した。伍挙が謎かけて諫めたが、益々ひどくなり、次に蘇従が「この身を賭してわが君の明を開くのが念願だ」として諫めた。すると淫楽をやめて政を聴くようになり、伍挙と蘇従に政を任せた。

出典は『史記』（巻四〇・楚世家第一〇）。『十八史略』（巻一・春秋戦国・楚）に

も近い文が見えている。

147 延暦神泉

延暦十三年十月平安京に遷都し神泉苑が作られた。天子遊覧の地で、近衛次将を別当とし、乾臨閣がある。二条の南、大宮の西八町、三条北、壬生の東の地である。

出典は『本朝神社考』(下之六・神泉苑)。そのもとは『拾芥抄』(中末・宮城)

の記述で、『古今著聞集』(卷三・政道忠臣第三・2延喜御時菅原道真乾臨閣遊覧をいさむる事)『塵添搯囊鈔』(卷一〇・緇問上一・五神泉園事)『雍州府志』(卷八・古蹟・愛宕郡)などの記事も知られる。また、神龍のことは『続古事談』(卷二・臣節・4藤原実頼神泉苑南面の楼門にて龍の変化を見る事)『富家語』(二四〇話)『本朝語園』(卷一〇・515神泉苑之龍)等に見えている。『扶桑蒙求』(卷上・28延暦神龍)は本書に依る。

148 文王靈沼

孟子が梁の恵王に会った時、王は池のほとりて雁や鹿を眺め「賢者もこんなふう

に楽しむのかな」と問うた。そこで、彼は「賢者なればこそ楽しむのです。『詩経』(大雅)の靈台詩にも……王靈園に在り、麀鹿の伏す攸、麀鹿濯々たり、白鳥鶴々たり。王靈沼に在り、ここに物ちて魚躍る、とございます。文王は民の力で台や池を作りましたが、民も飲んで靈台・靈沼と言ひ、鹿や魚を楽しんだのです。つまり、古の賢人は民と共に楽しんだのです」と。

出典は『孟子』(卷一・梁恵王章句上)。

149 良覚堀大

良覚僧正は短気な人だった。房の傍に大きな榎の木があり、「榎僧正」と呼ばれたが、雅名にあらずとて榎を伐った。それでも根株が残ったので「伐株の僧正」と言われ、それを嫌悪して掘り棄てたら、そのあとが堀のようになって「堀池僧正」と呼ばれる始末だった。

出典は『徒然草』(四五段。恐らく『野槌』のような古注本)。「扶桑蒙求」(卷下・67良覚堀池)は本書に依る。

150 子夏冠小

杜欽(字は子夏)は若い頃から経書を好んだが片目だった。杜鄴なる者と姓字が同じだった。人は欽を「盲の杜子夏」と言い区別した。欽は嫌い高広三寸の小冠を

作ったが、人は「小冠杜子夏」と呼び、鄴の方を「大冠杜子夏」と呼んだ。

出典は『漢書』(卷六〇・杜周列伝第三〇・杜欽)。他に『白氏六帖』(卷四・冠弁冕)『太平御覽』(卷二二・冠)『測鑑類函』(卷三七〇・冠四)等の類書にも見える。猶、本書本文に「著二小冠一高広才三寸」とあるが、前掲の『漢書』『白氏六帖』は「二寸」、他は「一寸」と異同がある。

151 高德献詩

三宅高德は備前児島の人。元慶(正慶が正しい)元年後醍醐帝は高德や諸将と密謀し鎌倉幕府を誅せんとするも発覚し、大和笠置山に依り、幕府軍に迫られ隠岐に幽閉された。高德は忠憤を発し、帝を奪還せんとするも、士卒散じたので一人行在所に至り、桜の大木を削って詩一聯を書き付け献じた。帝はその忠義を喜んだ。

出典は『本朝蒙求』(卷下・74高德題木)。もとは『太平記』(卷四・備後三郎高德事付呉越軍事)で、他に『日本古今人物史』(卷四・7児島高德)やそれをもとにしている『絵本故事談』(卷五)にも見え、『扶桑蒙求』(卷中・42高德献詩)は本書に依る。

152 君素達表

隋の撃鷹(鷹撃が正しい)將軍堯君素は屈突通に従い、唐軍を河東に防いだ。木の鵝鳥を作り上表文を首に掛け、黄河に流したところ、河陽守が入手し東都に迄届けられた。唐太宗は詔して節義を称した。「節義論序」に云う盛烈・峻節にふさわしい存在である。

出典は『北史』(卷八五・列伝第七三・堯君素)か。堯君素のことは他に『隋書』(卷七一・列伝第三六・堯君素)『通志』(卷一六六・堯君素伝)等にも見える。

153 間守寛橘

田道間守は垂仁帝の命で常世国に非時香果を求めに行き、帝が百四十歳で崩じ菅原の伏見陵に葬られる時に戻る。非時香果や八竿八綬を齎したもの、復命かなわず悲泣し、生きていても益なしと、帝陵に向かい叫哭して自ら死んだ。

出典は『日本書紀』(卷六・垂仁天皇九〇年二月、九九年七月、一二月、一〇〇年三月条)、『日本紀略』(前篇四・垂仁天皇)『帝王編年記』(卷四・垂仁天皇)にも関連記事がある。『扶桑蒙求』(卷下・2間守寛橘)は本書に依る。

154 徐市求薬

秦始皇二八年、方士徐市らは上書して童の男女を授けられ、三神山と不死薬を求めて海に入らんことを請い、遣わされた。

出典は『十八史略』（巻二・秦・二八年）。他に『史記』（巻六・秦始皇本紀第六。巻一一八・淮南衡山列伝第五八）にも見える。また、白居易新樂府「海漫々」（『白氏文集』巻三）詩にも詠まれよく知られた故事であり、日本にも多くの徐福伝説が残されているのは周知の通り。

155 延喜鸞位

延喜帝が神泉苑で鸞を捕らえるよう侍中に命じた。鸞が飛び立とうとすると、「帝の命である、飛び去るな」の言葉に従い留まった。感嘆した帝は羽に「鳥王」と記して放した。後に吉備の国で死んだが、そこを鸞森と言ひ、鸞は爵位を賜った。

出典は『本朝蒙求』（巻中・28延喜鸞）。もとは『平家物語』（巻五・五位鸞）『源平盛衰記』（巻一七・藏人鸞を取る事）などに見え、『本朝語園』（巻一・25延喜帝盛徳）にも引かれ、『扶桑蒙求』（巻上・15延喜鸞位）は本書に依る。

156 始皇松籙

始皇帝は鄒・嶧山に登り、魯の儒生達と議し、秦徳を刻み、泰山に登って封禪し、石を立て祀った。帰途暴風にあい松下に休むが、その松を封じて五大夫とした。

出典は『史記』（巻六・秦始皇本紀第六）。猶、関連記事は『漢書』（巻二五上・郊祀志五上）『十八史略』（巻二・秦始皇二八年。前出「下154徐市求薬」の出典部分の直前にあるので、本条でも典拠に用いても良かったか）や、『芸文類聚』（巻八・八・松）『白氏六帖』（巻三〇・松柏）『太平御覧』（巻九五三・松）『事類賦』（巻二四・松）『事文類聚』（前集巻一三・泰山）『円機活法』（巻二二・松）『湖鑑類函』（巻四二二・松二）等の類書にも引かれる。猶、この故事は平安朝詩文にもよく用いられ本朝類書にも所収されている。

157 匡衡改案

藤原公任は大納言の辞表を紀齊名・大江以言に依頼するものの出来に不満で、大江匡衡に請うた。妻の赤染右衛門が「公任は誇り高い人だから、先祖（忠仁公）は貴位に在ったが今は賤しい身分だ、とても綴れば意に称うでしょう」と助言し、それに従うと公任は称嘆した。

出典は『袋草紙』（巻上・雑談93話）か。この逸話は『十訓抄』（第七・可レ専二

思慮一事・9四条大納言の辞表）『中古歌仙三十六人伝』にも見え、『史館茗話』（40話）『本朝語園』（巻四・215公任辞表）や本書に受継がれる。また、『扶桑蒙求』（巻中・59赤染案表）の記事はこれ迄とは異なり本書に依らず、『大東世語』（巻四・賢媛）の記事を引き構成しているようだ。

158 潘岳代作

楽令広は河南尹を譲る表を潘岳に依頼した。岳は彼の旨意を聞き名文を成した。時人は楽の意と岳の文が相俟って優れたものになったのだと云った。

出典は『世説新語』（文学第四・70話）。『晋書』（巻四三・列伝第一三・楽広）にも見える。

159 文時冷泉

天曆帝が冷泉院に遊び文人を召して詩を作らせた。菅原文時が序者となるも、その文の成るのが遅く、還御の時になって奏覧されたが、帝は文中の句にしばし車を止め、久しく嘆称された。

出典は『本朝語園』（巻四・171村上帝停駕）か。『江談抄』（第六・14）『和漢朗詠集私注』（巻一・116）をへて『史館茗話』（56話）『本朝語園』にもとられる。猶、『本朝世説』（巻下・品藻・72話）は『続本朝通鑑』（巻一一・村上天皇三・応和元年三月五日条）に依り、『扶桑蒙求』（巻下・16文時冷泉）は本書に依る。

160 王勃滕閣

王勃は六歳で詩文を善くした。沛王に召され府の修撰に在職中、諸王の闘雞に「檄二英王雞」を書き、高宗の怒りに触れて解任さる。劍南を旅して山に登り、諸葛を思つて詩を賦した。また、死罪の官を匿い殺人を犯したこともあり、その為に父は交趾令に左遷された。彼がそれを尋ねた時、閻公が滕王閣を建てて宴会を設けることがあつた。その盛事を記録させるべく勃に請うと頃刻にして文を成し、人々は驚嘆した。

出典は『唐才子伝』（巻一・3王勃）。但し、『滕王閣序』は『古文新宝後集』に採られており、その『諺解大成』の注にも『唐才子伝』の引用が見えることは記しておきたい。『旧唐書』（巻一九〇上・文苑伝）『新唐書』（巻二〇一・文苑伝）にも王勃の伝は見え、『滕王閣序』執筆の故事は他に『唐摭言』（巻五）『摭遺新説』『中源水府伝』『歳時広記』（巻三五）等にも言及がある。

161 戸畔土蜘蛛

神武帝己未年二月、諸將に命じ軍兵を集めしむも、新城戸畔・居勢祝・猪祝の三処の土蜘蛛は自らの勇を積み参集しなかつたので、帝は誅せしめた。また、皇軍は高尾張村の土蜘蛛を葛の網で掩って襲殺し、その村を葛城と改めた。

出典は『日本書紀』(巻三・神武天皇己未年二月条)。他に『日本紀略』(前篇三・神武天皇即位前紀己未年二月条)にも見え、『扶桑蒙求』(巻中・48戸畔土蜘蛛)は本書に依る。

162 項羽沐猴

項羽は咸陽で殺戮を行い秦室を焼き、始皇の墓をあばき宝を収奪して東に去つたので、民は失望した。韓生は羽に「関中は要害の地で都にすると良い」と説いたが、羽は帰郷したくなり「富貴の身で帰らねば錦の衣を着て夜行くようなもの(このままではつまらぬ)」と言う。生はある人に「楚人は猿が冠をつけているようなものだ」と世間では言っているが、その通りだな」と嘲ったが、それを耳にした羽は彼を釜茹での刑にした。

出典は『十八史略』(巻二・漢太祖高皇帝)。他に『史記』(巻七・項羽本紀)にも見えている。

163 浄海物怪

平清盛は出家し浄海と号す。晩年家に物怪多く、早起きして庭を見ると数百の髑髏が並び、眼を開けて睨む。彼も睨みつけると一転して巨大な髑髏となり、眼爛々として睨むので、彼も負けじと対した。しばらくして髑髏は霜の如くに消え去り、彼は程なく病臥した。

出典は『平家物語』(巻五・物怪の巻)か『源平盛衰記』(巻二六・馬の尾に鼠巢ふ例付福原怪異)であろう。『扶桑蒙求』(巻下・36浄海物怪)は本書に依る。

164 王綏髑髏

夜中王綏の家の梁上に人の頭があり、床に墮ちて来た。流血滂沱たるものがあったが、彼は俄に荊州刺史になったものの父の謀事に連坐して弟と共に誅殺された。

出典は『晋書』(巻七五・列伝第四五・王湛伝付載偷子綏)。

165 侍従待宵

新都福原にいた後徳大寺左大臣実定は旧都に意中の小侍従を尋ね一夕合歓した。

別れの時小侍従が献じた「待つ宵に更けゆく鐘の声きけばあかぬ別れの鳥は物かは」の歌に感じ入り、これより彼女は「待宵の小侍従」と称されることとなった。

出典は『平家物語』(巻五・月見・待宵の小侍従の沙汰)か『源平盛衰記』(巻一七・侍宵侍従付優蔵人の事)あたりか。和歌は『新古今和歌集』(一一九二)に所収される。この逸話は有名で、『楊鳴曉筆』(第二〇・異名・7小侍従、8蔵人)『林羅山文集』(巻一五・「小侍従旧跡記」)『本朝女鑑』(巻一〇・9侍宵侍従)『本朝蒙求』(巻下・26侍従待宵)『本朝美人鑑』(巻三・6小侍従)『和歌威徳物語』(下四・人愛上・71「大納言なりける人小侍従と聞えし歌よみに……」)『本朝語園』(巻三・127侍宵侍従并艶蔵人)等にも見える。『扶桑蒙求』(巻中・61侍従待宵)は本書に依る。

166 趙嘏倚楼

趙嘏は会昌二年に鄭言の下で進士となり、大中年間に渭南尉となった。早秋に詩を賦し「残星数点雁横塞、長笛一声人倚楼」と作ると、杜牧は「趙倚楼」と呼んで賞嘆した。

出典は『唐才子伝』(巻七・180趙嘏)か。所掲句の詩題には「長安晚秋」(『唐詩品彙』『全唐詩』)「早秋」(『唐詩紀事』巻五六・趙嘏)「長安秋夕」(『三體詩』巻二)等揺れがあり、この逸話は他に『唐摭言』(巻七)『韻語陽秋』(巻四)『増修詩話総龜』(巻四・称賞門)『詩源弁体』等にも見える。

167 実基返牯

徳大寺右府実基の子公孝が検非違使別当の時、同僚と評議していると、徴土章兼の畜牛が上り込んで役所の座床に臥した。皆は不祥と思ったが、彼は「動物は無知で、足があるから上がり込むこともあるさ」と言つて飼主に返した。

出典は『本朝蒙求』(巻下・112実基返牛)か。もとは『徒然草』(二〇六段)で、『扶桑蒙求』(巻下・九実基返牯)は本書に依る。猶、本書の本文を読むと先の訳の様に実基ではなく息の公孝の逸話に受け取れる記述になっているが、それは『徒然草』『本朝蒙求』とも異なり、誤っていることになる。

168 允濟還牛

張允濟が武陽令の時のこと。ある民が牝牛を妻の実家に貸した。十餘頭の子牛を生んだ後、還してもらおうとしたが、返さなかつた。そこで県に訴えたが埒が明かず、允濟の判断を仰ぐこととなった。彼はその民を捕縛し頭を隠した上で、妻の実

家に行つて、「牛どろぼうを捕まえた。由来を質すのですべて牛を出せ」と言った。するとその家では「これは婿の家の牛でして……」と弁明したので、被いをとつてやり、「牛を持ち主に還せ」と命じた。

出典は『事文類聚』（後集巻三九・牛）か。ただ『十七史蒙求』（巻八・張捕盜牛）『古今合璧事類備要』（別集巻八二・牛）や『測鑑類函』（巻四三五・牛三）にも近い。猶、張允済の伝は『旧唐書』（巻一八五上・列伝第一三五上）『新唐書』（巻一九七・列伝第一三二）に見える。

169 広相赤犬

橘広相は藤原佐世の讒訴により昭宣公（基経）の怒りにあい死んだ。その霊は化して赤犬となり、佐世が家に入る毎に吠えた。

出典は『本朝一人一首』（巻八・377橘広相）か。それを利用したのが『本朝語園』（巻四・158広相敏速）で、もともとは『十訓抄』（第四・可レ誠二人上多言等一事・16橘広相勅答の文）に出る話。『扶桑蒙求』（巻中・43広相赤犬）は本書に依る。

170 彭生大家

齊侯が具丘で狩をした。大きなイノシシを見た従者が「魯の桓公を殺した」公子彭生だ」と言うと、侯は怒り「あえて現れたか」と言つて射た。するとイノシシは人のように立つて啼き、侯は恐れて車から墮ち、足を傷めて靴を亡くした。

出典は『春秋左氏伝』（巻八・莊公八年一二月）。他に『白氏六帖』（巻三〇・猪）『太平御覧』（巻九〇三・豕）『事文類聚』（後集巻四〇・豕）『古今合璧事類備要』（別集巻八二・豕）『円機活法』（巻二四・豕）『測鑑類函』（巻四三六・豕三）等の類書にも見える。

171 宗尊鼠穴

宗尊王は後嵯峨帝の皇子。源頼朝が鎌倉幕府を開き、頼家・実朝を経、後嗣なければ左府藤原道家の息頼経を奉じ、子の頼嗣辞職の後、宗尊王を將軍に迎えたが、北条時宗が辞職させ、王は帰洛した。無聊憂悶し「虎とのみ用ひられしは」云々の処世の不遇を嗟嘆する和歌を残している。

出典は『増鏡』（第五・内野の雪〈宗尊親王元服・東下〉。第六・煙の末々〈宗尊親王御書始〉。第七・北野の雪〈宗尊親王の失脚・上洛〉）か。この間のことは他に『五代帝王物語』『保暦間記』あたりにも言及がある。『扶桑蒙求』（巻上・16宗尊鼠穴）は本書に依る。猶、宗尊の和歌は、東方朔「答客難」〔文選〕巻四五）に

「……用レ之則為レ虎、不レ用則為レ鼠。雖レ欲レ節効レ情、安知レ前後」とあるのをふまえたもの。

172 馬援鷲水

馬少游は「男子の世に在る間は衣食に不自由せず、荷車を馱馬に引かせ、村人には善人と呼ばれるくらいでいい」と馬援に語つた。後に援は「交趾を征し、浪泊・西里の間に在つた時、下は水溜り、上は霧で（毒気を含んでいた）空飛ぶ鷲もバタバタと水に落ちたものだ。横になつてあの少游の言葉を想い出したが、もはやそれもかなわぬ」と言つた。

出典は『後漢書』（巻二四・馬援列伝第一四）。猶、馬援が交趾に遠征した時の瘴氣立ちこめる様は『太平御覧』（巻九二三・鷲）『事文類聚』（後集巻四二・鷲）『古今合璧事類備要』（別集巻六六・鷲）『測鑑類函』（巻四二七・鷲二）等にも引かれている。

173 師鍊積書

虎関師鍊は幼時より穎悟で文殊童子と号し、経書も一覽で誦した。八歳で三聖寺宝覚和尚の下で出家し、東福寺・南禅寺に住し、多くの学徒を育て、晩年は海蔵院に退休した。貞和二年（一三四六）七月に寂す。寿六九歳、法臘六〇年で、本覚国師と諡された。『仏語心論』『元亨積書』『十勝論』『正脩論』『濟北集』並びに語録等がある。

出典未詳。猶、師鍊の伝には例えば『扶桑禅林僧宝伝』（巻五）『本朝高僧伝』（巻二七）や『早霖集』（虎関和尚行状）『虎関紀年録』『延宝伝燈録』（巻一一・臨濟宗・東福東山湛禅師法嗣）等がある。『扶桑蒙求』（巻下・23師鍊積書）は本書に依る。

174 贊寧僧史

釈贊寧は円明通慧大師の号を勅賜され、著に『大宋高僧伝』『大宋僧史略』がある。「僧史略序」に「原るに彼の東漢より我が朝に至るまで僅かに一千年。……詔旨を奉り、高僧伝の外、別に僧史を修し、及び育王の塔を進む……約して三巻と成し『僧史略』と号す。蓋し裴子野が『宗略』に取り題目とす」とある。

出典未詳。序文引用に『大宋僧史略』を披見していることがわかる。贊寧のことは『仏祖歴代通載』（巻二六）『釈史稽古略』（巻四）『釈門正統』（巻八）『律苑僧伝』（巻八）等に見える。

175 宗易器制

千宗易は泉南の人で室町家に仕えた。数奇の道をもって知名あり。天正帝が関白秀吉邸に行幸した時、秀吉は数奇に長ずる数人を奏して綱位につけたが彼のみ受けず、秀吉は利休居士の号を授けた。

出典は『日本古今人物史』(巻七・29千宗易伝(茶人))。『扶桑蒙求』(巻下・12宗易器制)は本書に依る。

176 伯熊茶理

陸羽と常伯熊は茶に精こしかつた。御史李季卿が江南に来た時、ある人が伯熊が茶を善くするというので招いたところ、彼は黄帔衫・烏紗幘を着し、茶器をとって手前を行った。また、羽を招いたところ、野服で茶具を携え入り、伯熊と同様に行つたが、李は心中彼を鄙しみ錢三十文を取り煎茶博士羽に与えた。彼は之を恥ぢ「毀茶論」を著した。

出典は『新唐書』(巻一九六・列伝第二二一・陸羽)か。右の「毀茶論」執筆に至る逸話は『事文類聚』(続集巻二二・茶)『古今合璧事類備要』(外集巻四二・茶)『円機活法』(巻一五・茶)等に『語林』所引で見えている。

177 冬嗣学院

藤原冬嗣は器度寛弘で英才にして偉略あつて学を好み、『弘仁格』『弘仁式』を撰進した。また、勸学院を建て、藤原氏の年少者に学問の場を設けた。

出典は『本朝蒙求』(巻中・122冬嗣格式)。その後の『本朝儒宗伝』(巻中・藤原冬嗣)にも言及あり、『扶桑蒙求』(巻上・69冬嗣学院)は本書に依るだろう。

178 伯施文館

唐太宗は弘文館を置き、經史子集の二十餘万卷の書を聚め、天下の文学の士を選んだ。虞世南らは学士を兼ね、帝は成務の間に彼らを召し、古人の言行や政事を討議研究して夜分に至ることもあつた。

出典は『十八史略』(巻五・唐・太宗文武皇帝)。猶、『旧唐書』(巻七二・列伝第二二・虞世南)『新唐書』(巻一〇二・列伝第二七・虞世南)にも関連記事がある。

179 一条脱衣

一条帝が冬夜の霜寒の時に御衣を脱いだ。皇后が理由を問うと、「延喜帝は寒い夜に御服を脱がれたが、それは天下の民人が寒苦に耐えられぬのを憫んでの事だ。

今、私も不徳の身ながらもその先例に倣いたい」と仰つた。

出典は恐らく『古事談』(第一・王道后宮・34一条院寒夜に直衣を脱ぐ事)か、『続古事談』(第一・王道后宮・1聖帝寒き夜、夜御殿に衣を脱ぐ事——一条と醍醐)。或いはそれをもとにする『本朝語園』(巻一・26一条帝寒夜脱衣)であろう。一条帝のこの話は『中外抄』(上・保延三年三月二〇日条)『宝物集』(巻六)『月の刈藻』(巻上)にも見え、『十訓抄』(第一・可レ定二心一操振舞一事・仁徳天皇及び延喜帝の御仁政)『大鏡』(巻下・雑々物語)では醍醐帝のことのみ記されている。『扶桑蒙求』(巻上・二三二条脱衣)は本書に依る(猶、かつ次の「宋帝撤炭」の故事も取込んでいゝ)。

180 宋帝撤炭

宋の太宗は冬に獸炭を片付けさせた。左右の者が「今日ほどく寒うございます」と申し上げると、「天下の民もこの寒さに苦しんでおらう。朕だけぬくぬくとはできぬ」と言われた。

出典は『榊巷談苑』(35)か。その文中で榊原篁洲(一六五六一一七〇六)は『国老談苑』(宋・王銍)に見える故事であることのみならず、「延喜帝の寒夜に御衣をぬがせ給ひけるによく似たり」と前項「179一条脱衣」の故事と一部対置しているのは注意される。前項の寒夜脱衣の話なら、朱百年(『孝子伝』(23)『注好選』(巻上・62)『今昔物語集』巻九・12など)の逸話で対しても悪くはないが、ここは天皇と皇帝を対にする意識があつたものと思う。

181 義家元服

源頼義が石清水八幡に後嗣を祈つて生まれたのが義家で、その大神靈廟の前で元服し、八幡太郎義家と号し、その功名は史書に輝かしい。

出典は『閩中鈔』(巻二・源義家)か。『扶桑蒙求』(巻下・53義家元服)は本書に依る。

182 魯襄初冠

晋侯は河上で宴を催し、襄公に年令を問うた。十二歳と知ると「国君は十五歳くわのあせ子を設けると言うが、まず元服するのが礼だ」と奨めた。すると、季武子は「先祖に酒を進め鐘磬の楽を奏して先祖の廟で行うのが筋だが、今主人は旅先に在り、その用意もないので、親戚の国にお願いして貸してもらいましょう」と答え、衛の成公の廟で元服した。

出典は『春秋左氏伝』(巻三〇・襄公九年)。

183 久秀謀逆

松永久秀は三好長慶に仕えて軍功あり多聞城に居した。織田信長の下に降り、叛くと信忠に討たせた。彼は阿波の辺鄙な地に生まれ、権勢を振って一世の榮華を得たが、室町將軍義輝を殺し、主家の義継を伐ち、奈良大仏殿を焼いたという不善の殃からは免れえなかつた。

出典は『日本古今人物史』(巻三・7松永久秀)。「扶桑蒙求」(巻中・26久秀謀逆)は本書に依る。

184 陽虎作乱

定公五年に季平子が死ぬと、陽虎は怒って季桓子(平子の子)を捕らえたが、盟を交わし許した。七年に斉は魯を討ち、鄆をとり陽虎に治めさせた。八年に陽虎は三桓の嫡子を滅ぼし、庶子を立てようとし、季桓子を殺そうとするも果たさず、逆に三桓に攻められた。九年には魯が陽虎を討ち、彼は斉、晋へと逃げた。

出典は『史記』(巻三三・魯周公世家第三)。

185 清氏雪簾

清原元輔の女清少納言は一条帝の藤皇后(定子)に仕えていた。冬の雪の時に仲間と火桶を擁し話していると、「少納言、香炉峰の雪はどうかしら」と言われ、彼女はすぐに珠簾を巻き上げた。后は顧み笑顔を見せて嘉され、周囲も感動した。「枕草子」なる書は世に盛行している。

出典は『枕草子』(三巻本二八二段)か。この話は有名なので、『十訓抄』(第一・可レ定心操振舞一事・21清少納言香炉峰の雪)『本朝女鑑』(巻九・清少納言)『本朝蒙求』(巻中・13清紫才女)『絵本故事談』(巻八・清少納言)等にも見えるが、いずれも問うたのは皇后定子ではなく一条帝ということになっている。また、『本朝列女伝』(巻三・紫式部)や『繪餘雜録』(巻三)では、清少納言ではなく、紫式部の話としていて、これらを批判しているのが『広益俗説弁』(巻一四・婦女)である。猶、『百人一首一夕話』(巻五・清少納言)『扶桑蒙求』(巻中・62清女襲簾)『瓊才餘滴続編』(巻下・清女襲簾)『日本蒙求』(巻下・清氏捷給)などにも採られている。

186 謝女風絮

謝道韞は物事をよく聴き知り弁舌達者だった。叔父の謝安に「詩経」で一番の句は？」と問われ、大雅「烝民」の末章を詠ずると、安は雅人の深致があると思つた。また、雪の降るのを見て「何に似ているか」と安が問うと、謝朗が「塩を散らしたみたいだね」と言ったのに対し、彼女は「柳絮が風に飛ぶという方がいいわ」と答えたので安は喜んだ。

出典は『蒙求』(136「謝女解圍」)。この柳絮逸話は殊に有名で、『世説新語』(言語第二・71話)『晋書』(巻九六・列伝第六六・列女伝(王凝之妻謝氏))や『芸文類聚』(巻二・雪)『世説』所引)『初学記』(巻二・雪)『語林』所引)『太平御覽』(巻二二・雪)『晋書』所引)『古今合璧事類備要』(前集卷三・雪)『世説』所引)『事文類聚』(前集卷四・雪)『世説』所引)『円機活法』(巻二・雪)『世説』所引)『金壁故事』(巻一・雪下誰吟三)柳絮詩二)『潜確居類書』(巻五九・女子)『淵鑑類函』(巻九・雪一)『世説』所引)他、様々な類書に引かれ、本朝の類書にも見えて平安朝には既に詩に詠まれていた。

187 経家範駟

都築経家は馬術にすぐれ平氏の家臣だったが、後に捕らえられ梶原景時の下に属した。陸奥から荒馬が献じられ、誰も騎乗できなかつたが、景時が彼に薦めると経家は乗りこなし、皆が驚いた。頼朝は感じ賞して罪を赦し御史とした。

出典は『日本古今人物史』(巻七・9都築経家伝)。もとは『古今著聞集』(巻一〇・馬芸第一四・11都築経家悪馬を御する事)であり、『扶桑蒙求』(巻中・50経家馳駟)にも採られている。

188 王良善御

王良は昔のすぐれた御者である。「漢書」の顔師古の注に依ると、『左伝』『国語』『孟子』などを調べると郵無恤・郵良・劉無止・王良はすべて同一人物である。出典は『漢書』(巻六四下・列伝第三四下・王褒)。

189 長明方丈

鴨長明は菊大夫と号し和歌管絃の道に長け、和歌所の寄人に補せられた。賀茂の社務職を望むも果たさず、出家して蓮胤と号し、大原に退去して『方丈記』を撰し、琴瑟や笙簧を愛玩した。諸国を旅して詠吟多く、「世見の小川」の一首は人口に膾炙し、遺稿を『無名鈔』という。

出典は『日本古今人物史』(巻七・11鴨長明)。他、長明のことは『十訓抄』(第九・可レ停ニ怨望ニ事・7賀茂長明の出家)、『本朝遷史』(巻下・鴨長明)、『扶桑隱逸伝』(巻下・鴨長明)、『本朝蒙求』(巻上・68長明方丈)等にも見え、『扶桑蒙求』(巻下・七五長明方丈)は本書に依る。

190 陶潜帰去

朱文公が云うに「帰去来辞」は陶潜の作で、彭沢県令の時に束帯して上役に拜謁せよと言われ、五斗米の為に腰を折る迄もないと、官をやめて故郷に帰った、その志が伺える作だ。晋・宋に仕えず靖節徴士と諡された。欧陽公は晋に文章は無いが幸いにこの一篇があると評した。

出典は『古文真宝後集諺解大成』(辞類)。それに所収される「帰去来辞 陶潜明」の作者注に付される文の援引(『箋解古文真宝後集』巻一も同じ)。

191 信謙戦争

武田信玄は機山と号し、幼くして聡敏で、父信虎に代って信州の海野口の壘とりでを兵三百で急襲し勝利した。信州平定後上野を討ち、駿府を陥れて遠州をかね、美濃東部迄その勢は至った。上杉謙信はもと長尾氏で、上杉家の管領職を譲り受け越後に在った。幼くして英才あり、驍勇奇策の良将と称され、信玄はひとり謙信のみを敵手とした。

出典は『日本古今人物史』(巻一・35武田信玄、36上杉謙信)。同書の信玄・謙信条から抄出し合綴した文より成る。『扶桑蒙求』(巻上・86信玄戦争)は本書に依るか。

192 孫曹割拠

『文選』の「三都賦」李善注に「劉備は益州を都として蜀と号し、孫権は建業を都として呉と号し、曹操は鄴に都して魏と号した」とある。『十八史略』で、曾先之は天下統一されていない場合は、一国の源流に続くもの、つまり後漢に接続する魏を中心に加え、漢呉を付記するが、私劉刻は朱子の『通鑑綱目』に従い、蜀漢を正統として記述することとした。

出典は和刻本『大臣註文選』(巻四)の「三都賦序 左太沖」とある作者名に付記された李善注の一部と、『十八史略』(巻三・三国)の冒頭文を合綴したもの。

193 広幡薫物

村上帝は杏冠折句の御歌を多く妃に送ったが、広幡御息所だけが御意を解して薫物を献じたので、益々彼女は寵愛された。

出典は『俊頼髓腦』(巻上・杏冠)か『十訓抄』(第七・可レ専ニ思慮ニ事・8村上天皇のあはせたきものの御歌)であろう。『扶桑蒙求』(巻下・63広世献香)は本書に依る。

194 斉后解環

斉の閔王が莒で殺された。子の法章は名を変え、莒の太史の敷きよの家に雇われていたが、太史の娘はその容貌を見て常人ではないと思いついた。章は立って襄王となり娘を王后とした。王亡き後は子の建が継ぎ、彼女は秦によく事え、諸侯とも信頼関係を築き、四十年余り戦争もなかった。秦昭王が后に玉連環を送って来て、「この玉環を解くことができるかな」と言うので、后は椎つちで玉環を打ちこわして、「謹んでお解きました」と言った。

出典は『蒙求』(135「斉后破環」)。上記は『戦国策』(巻四下・斉策)を引き、『古注蒙求』は「春秋後語」を引用。他に、『太平御覧』(巻六九二・環)、『淵鑑類函』(巻三七二・環)にも見える(共に『春秋後語』所引)。

195 公任長谷

藤原公任は博文多才で詩歌にすぐれ『和漢朗詠集』を撰した。官路拙く心楽しまず、愛娘を失って出家を思い、万寿二年(一〇二五)洛北らくほくの長谷ながたにに仏宇を創建し、三井寺の心誉の下に得度したと聞いて子の定頼にも驚いた。

出典未詳。『百人一首』の注あたりか。猶、この記述内容は『百人一首一夕話』(巻五・大納言公任)に受継がれる。『扶桑蒙求』(巻中・18公任長谷)は本書に依る。

196 安石半山

王安石は宰相となり新法を行い、青苗・市易・保馬・保甲・新経字義・水利・雇役等の名を変えたが、職を辞し金陵に帰ってから変法の非を悔いた。宰相になった時、窓に「霜松雪竹鍾山寺」云々と題書した。黄山谷は、公の晩年は詩律精嚴で沈澆が生ずる風味があると評した。荆公に封ぜられ半山と号した。

出典未詳。王安石の伝は『宋史』(巻三二七・列伝第八六)に見える。

197 忠綱越川

足利忠綱は下野の豪族で、身に三絶があった。百人力と十里に聞こえる声、一寸の齒の長である。宇治川の合戦で敵を破り、義広に従うも志を遂げず西海に赴き、父俊綱は從者に殺された。

出典は『日本古今人物史』（巻四・7足利忠綱）。『扶桑蒙求』（巻中・57忠綱越川）は本書に依る。

198 終軍入関

前漢の終軍は若い頃から学を好み、物事を広くわきまえ文章を作り、郡中で有名だった。武帝は博士に任じた。彼が徒歩で函谷関に入ると関吏は繻を与えた。それは帰る時の手形であったが、彼は「男子が都に行くからには（出世して）、手形などでは還るまい」と繻を棄てて去った。後年、四方への使節となり関を出る時、吏は彼を覚えていた。諫大夫となり南越に使いし、王に漢に入朝するよう説いたが、その宰相の呂嘉が反対して王を殺し、漢使も皆殺された。彼は二十余歳で死に終軍と称された。

出典は『蒙求』（402「終軍棄繻」）。終軍の伝は『漢書』（巻六四下・列伝三四下）に見える。この話は『事文類聚』（統集巻三・関市）『潜確居類書』（巻四〇・関。巻八四・志気）などにも所収される。

199 豊国猿面

豊臣秀吉は尾張の愛智郡中村郷の筑阿弥の子。母が日輪の懐に入ると夢みて生み、日吉と名付けられた。永祿元年（一五五八）路傍にて織田信長に奉仕を訴え、「お前の顔は猿に似ている……」と許された。犬山城攻めの時や信長の狩においても秀吉は存在をアピールして信頼を得、武功もたて将となった。天正一〇年（一五八二）明智光秀を誅して天下統一し、関白となり、大阪城・聚楽第・伏見城に住んだ。出典は『太閤記』か。秀吉については『大かうさまぐんきのうち』『豊鑑』『新撰豊臣実録』『天正記』『太閤素生記』『続太平記』『絵本太閤記』『真書太閤記』『太閤正伝記』『太閤御実伝』『天正軍記』『太閤真蹟記』など多くに記される他、浄瑠璃・歌舞伎にも描かれる。『扶桑蒙求』（巻中・102豊国猿面）は本書に依る。

200 漢祖龍顔

漢の高祖の母は夢中に大沢の堤で神と遇う。時に雷鳴あり、父が往き視れば、母の上に蛟龍が見え、娠り生まれたのが劉邦である。鼻が高く顔は龍に似て面長で、

頬や顎ひげが美しく、左の股に七二の黒子があつた。

出典は『蒙求』（52「漢祖龍顔」）。但し、後半の「云々。当三秦湯方煖……暴二起風埃之中」の部分は未詳。劉邦のことは『史記』（巻八・高祖本紀第八）『漢書』（巻一上下・高帝紀第一上下）『十八史略』（巻二・西漢・漢太祖高皇帝）などにも見える。

201 扶桑中華

以下は跋文に当たる部分で、日本と中国の意。殊に出典は要しまいと思う。

202 風馬不及

齊侯は諸侯の軍を率い蔡を討った後、楚を伐とうとしたので、楚子は使いをやり「君は北海、私は南海にいる。（遠く離れていて）発情した馬や牛がけんかすることもありますまい。わが国までやってくるとはどうしたことでしょう」と言った故事（『春秋左氏伝』卷一二・僖公四年）。ここでは、日本と中国は遠く離れてはいるが、双方の古い歴史を調べ、事蹟を並べ比べて、集めてみたということ述べている。

203 斟酌古史

古い歴史を調べ考えて取捨すること。

204 比事彙輯

日中の史事説話を並べ比べて、集めて編したものであるということ。

（完）